浄土十勝箋節論巻上

乾下菩薩大乗戒比丘澄円撰

末法利益勝 第三

夫れ月、重山に隠れ、風、太虚に息みてより後、居往き諸来りて已に二千有余の歴数を経たり。其の中に一千載は正法・像法の時分にして已に過ぎ畢んぬ。其れより以往文保丁巳に至りて二千祀の間は、末法の闇深くして聞く聞く二種生死の長夜に迷い、三学の勢い弱くして看る看る捉・縛・殺は賊の力用無し。嗚呼、鉛刀は終に鏌耶が績無し。泥蛇、豈に鷹竜の能有らんや。『倶舎論』に云く、「千年を過ぎ已りて入聖することを得ず」(1)上已。又た云く、「有るが説く、証法は唯だ住すること千年」(2)上已。宝師之れを受けて云く、「然るに証法を説くことは亦た是れ多に従う」(3)上已と。

然れば則ち余、諸方の皁白を見聞するに、適正信心を発し真修行を起つるの彙有りと雖も、其の体達徹悟を尋ぬれば、麟角于りも希に、鳳觜于りも少なり。今正しく正・像・末の三時代謝の相を明して、以て教・行・証の存没有無の義を評すべし。謂く、『大

(1) 出典未詳。普光『倶舎論記』（正蔵四一・四三八上）に同文あり。
(2) 世親『倶舎論』（正蔵二九・一五二中）。
(3) 出典未詳。明恵『摧邪輪荘厳記』（浄全八・七八五下）に同文あり。

集月蔵分』の第九に云く、(4)

我が滅後に於ては五百年の中に諸の比丘衆、猶お我が法に於て解脱堅固なり。後の五百年には我が正法の禅定三昧に住することを得て堅固なり。後の五百年には読誦多聞に住することを得るに堅固なり。後の五百年には我が法の中に於て多く塔寺を造ることを住することを得るに堅固なり。後の五百年には我が法の中に於て闘諍言訟し白法隠没して損減堅固なり上已と。

又た『日蔵分』の第六に云く、(5)

何者をか名づけて末法世の時と為す。謂く、読誦の人、波羅提木叉の道中に依りて行ぜず。若し坐禅せざれば則ち三摩提を得ること能わず。乃至第四の果を得ず。乃至寂滅三昧を得ず。是れ則ち名づけて末法世の時と為す上已。

二祖大師之れを受けて云く、(6)

是の故に『大集月蔵経』に云く、我が末法の時中、億億の衆生行を起こし道を修せんに、未だ一人も得る者有らず。当今

(4)『大方等大集経』(正蔵一三・三六三上～中)。
(5)『大方等大集経』(正蔵一三・二六七上)。
(6)道綽『安楽集』(浄全一・六九三上)。

は末法、現に是れ五濁悪世なり。唯だ浄土の一門のみ有りて通入すべきの路なり。是の故に『大経』に云く、「若し衆生有りて縦令一生悪を造るとも、命終の時に臨んで十念相続して我が名字を称せんに、若し生ぜずんば正覚を取らじ。乃至縦使一形悪を造るとも、但だ能く意を繫けて専精に常に能く念仏すれば、一切の諸障、自然に消除して定んで往生を得。何ぞ思量をせずして都て去る心無きなり」已上。

今、経文を案ずるに五箇の五百の中に戒定慧の学は只だ前三に在るのみ。然れば則ち末法の時に至りて断惑証理の人無きことは在文分明なり。理を得て炳焉なる者か。凡そ無漏の三学に非ざるより真諦の理性を証せずということは、大小両乗の定むる所、顕密二宗の談ずる所なり。抑当代末法の時に居り、自力難証の修行を致すこと、猶お曲木を稠林に曳くが如く、又た膠舶を苦海に浮かぶるに似たり。嗚呼、倩以んみれば、摩尼は空しく名のみを聞く。麟鳳誰れか実を見ん。賢聖は只だ名のみを聞く。三学誰れか実を見ん。正法五百年の内には持戒得道の者甚だ多く、像法千

載の外には護禁修徳の彙維れ鮮し。当今に至りては、時是れ濁悪にして人の根劣鈍なり。其の道に依稀し、其の風に髣髴せり。妙道鑽り難く、軽毛風に随う。故に時根に牽かれ、逆流猶お難し。

古えに云く、(7)

駑蹇の乗は千里の塗に騁せず。燕雀の儔は六翮の用を奮わず、蚊虻終日経営するも、階序を超ゆること能わず。蒼蠅の飛ぶは数歩を過ぎず 云云。

此れ当今末法の悪時に於て、三学分外の衆生有りて聖道の修行を致せども、入証の巨益無きを之れ謂うのみか。

粤こに案ずるに、吾が浄土教の得脱は三学の修行とも云わず、断惑証理とも云わず、唯だ一声称念の功力に由りて九品清浄の海衆に列なるが故に、其の得益広く末法万年の末、及以び法滅百歳の時に通ず。夫れ以みるに、悪世煩悩の疾瘵は深く隠れて肓上膏下に居る。所以に中下の三学之れを治すること能わず。然るに本願称名の妙行は是れ千帀の艾灸、至心信楽の用心は、乃ち一服の八毒のみ。所以に能く逆謗肓膏の疾瘵を療痊す。孰れか之れを

(7) 出典未詳。

服餌せざる者ぞや。

『末法灯明記』に云く、[8]

『大術経』を案ずるに、仏涅槃の後、初めの五百には大迦葉等の七賢聖僧、次第に正法を住持して滅せず。五百年の後には正法滅尽す。六百年に至りて九十五種の外道競い起る。馬鳴出世して諸の外道を伏す。七百年の中に龍樹出世して邪見の幢を摧く。八百年に於て比丘縦逸にして僅かに一二人道果を得ること有り。九百年に至りて奴は比丘と為り、外婢は尼と為る。一千年の中には不浄観を聞きて瞋恚して欲せず。千一百年には僧尼嫁娶して毘尼を毀謗す。千二百年には諸の僧尼等俱に子息有り。千三百年には袈裟白に変ず。千四百年には四部の弟子皆獵師の如く三宝物を売る。千五百年には俱睒弥国に二僧有りて互いに是非を起こす。遂に相い殺害す。仍って教法竜宮に蔵ると。『涅槃』の十八、及び『仁王』等に復た此の文有り。此れ等の経文に準ずるに、千五百年の後には戒定慧有ること無し已。上

(8)『末法灯明記』(『真宗全書』五八・四九五下〜四九六上)。

南山律徳の『諸経要集』に云く、

正法千年は三法具足す。像法一千年は唯だ教行の両法を護る。更に証法無し。末法の中には唯だ教のみ有りて行証無し已上。

『補註』に云く、(9)

有人青竜の疏を引きて云く、「教有り、行有り、証有るを名づけて正法と為す。正とは証なり。教有り行有り証無きを名づけて像法と為す。像とは似なり。此の三無きを名づけて末法と為す。末とは微なり」已上。

衆文炳然なり。末法に証理の人無しということは観師傷歎して曰く、(10)

真言止観の行は道幽かにして迷い易く、三論法相の教は理奥うして悟り難し。勇猛精進にあらずんば何ぞ之れを修せん。聡明利智にあらずんば誰れか之れを学ばん。朝家簡定して其の賞を賜い、学徒競望して其の欲を増す。三密の行を暗うして忝くも遍照の位に登り、毀戒の質を飭りて誤りて持律の職

(9) 従義『法華三大部補註』（卍続蔵二八・二五九上）。

(10) 永観『往生拾因』（浄全一五・三九四上）。

に居す。実に世間の仮名は智者の厭う所なり已上。

此の言実なるかな。誰れの有道の学者か恥慚せざらん。嗚呼、大小の毘尼を学して戒行を守らず。顕密の経軌を習いて妙観を凝らさず。豈に学行参差の失を招かざらんや。諺に曰く「孝経を擎げて母頭を打つ」ということ、蓋し斯の謂か。夫れ在世正法の俊人を摂するは、是れ顕密聖道の諸門なるか。濁世末代の頑魯を益するは、乃ち別意弘願の一路なるか。然れば則ち自力自摂の万行は今時不応の教法なり。已陳の芻狗再び羞むべしや、如何。学者自量せよ。延く。

天の暦重ねて用うべしや否や。行人思察せよ。小子倩意みれば、当今の聖道は宛も商丘の大木の如し。末代の自力は、譬えば蟷蜋が運斧に似たり。智人商量せよ。智人商量せよ。『牟子理惑篇』に云く、(11)

孔子の術を持ちて商鞅が門に入り、孟軻の説を齎して蘇張が庭に詣するに、功分寸なくして過ち丈尺あらんと已上。

(11) 僧祐『弘明集』（正蔵五二・四下）に引用あり。

夫れ当今末法の時、顕密の諸教を齎して魯鈍の人を摂し、功一銖なくして過ち万仞有らんか。又た『牟子理惑篇』に云く、[12]

前に隋珠有れども、後えに虓虎あれば之れを見て走りて、敢て取らざるは何ぞや。其の命を先にして其の利を後にすればなり已上。

今顕密の大法八埏に盈れ、之れ勤修せざるは何ぞや。是れ即ち其の証理を先として其の信修を後にすればなり。夫れ愚老静かに以れば当今末法の時は約時十悪行わるること盛んに、約機大行の路よりも嶮しきが故に、三車四車の宝輅轅摧けて煩悩の険難陵ぎ叵く、五濁乱漫すること約機巫峡の水よりも漲るが故に、三乗四乗の法船柁折れて生死の愛河超え難し。之れを如何が為んや、之れを如何が為んや。是れ即ち結縁を語して見性を言わざるのみ嗚呼、縦い四舟楫固しと雖も、是れ艑舟小艇か。一二三五を渡すが故に、六八の願船は乃ち巨舸大舶か。千万兆載を絶すが故に、夫れ末代の行者の自力の修行を致して証理の大果を得ざること、是れ男麻の花有りて実登らざるが如し。持名の行人僧祇の妙行無

(12) 僧祐『弘明集』（正蔵五二・三上）に引用あり。

くして不退の高科に昇進することは、乃ち妻麻（せいま）の花無くして果（み）を結ぶに似たり。智人商量せよ。啻だ教内の修行に行証無きのみに匪ず。又た教外別伝・単伝心印の修行も末法の時に至りぬれば更に徹悟の人無し。謂く、『達磨尊者讖記』に云く、(13)

吾が滅後二百年に至りて、衣は止めて伝わらざれども法は沙界に周ねからん。明道の者は多く行道の者は少なく、説道の者は多く通理の者は少なかるべし已上。

夫れ、若しは教外の単伝、若しは教内の修行等、末法万年の中に於て更に行慧証理無きこと、在文掲焉（けちえん）なるものか。然るに今、吾が弥陀本誓の別益は、三学の有無をも簡ばず、五逆の犯不をも論ぜず、只だ一声十念の功力を納受して三輩九品の蓮台に引接したまえるものなり。孰れか之れに帰せざるものか。密乗の行者難じて曰く、夫れ顕宗の諸家には皆三時代謝の憂い有り。秘密の一門には特り正像末法の異無し。且く『相応経』に曰く、(14)

若し末法世の人、長（とこしな）えに此の真言を誦すれば、能く願を成満すること意の如し。若し一洛叉を誦すれば大金剛身を得、若

(13) 出典未詳。『釈氏稽古略』（正蔵四九・七九七下）に同文あり。

(14)『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』（正蔵一八・二五八中）に同文あり。

し一倶胝を誦すれば遍照尊と成ることを得已上。

又た『法華略釈』に曰く、[15]

双円の性海には常に四曼の自性を談じ、重如の月殿には鎮(おさ)えに三密の自楽を受く。人法法爾たり。興廃何の時ぞ。機根絶絶たり。正像何ぞ別たん已上。

又た、『大日経要義』に曰く、[16]

問う。正法像法の差別をば密教には許さず。何ぞ今之れを用うるや。答う。密教に正像別無しとは自教に於て論ず。若し顕乗を見れば其の別無きに非ず。問う。其の顕教には即ち有り。密宗には即ち無しという義、云何。答う。正法は教行証の三つ倶に有り。像法には教行の二つ有りて、証理の益無し。末法には唯だ教のみ有りて行証無し。密教の正機は皆頓悟なるが故に此の差別無し。顕機は爾らず。其の別有り已上。

経釈分明なり。三時の別無しということを。若し爾らば、全く真言密教に比対して以て末法利益の一勝を立つべからざる者なり、何如。答えて曰く。夫れ諸法は現量に若かず。然るに今現に四曼

(15) 空海『法華経開題』(正蔵五六・一七二下)。
(16) 出典未詳。

三密の行者を看るに孰れか竜猛・竜智の慧雲を吐きたまいしに斉しきや。誰れか無畏・金智の弁泉を湧かしたまうに同じきや。将た又た、厥の霊験如何。抑亦(そもそも)た成仏に遅速有り。断証に遠近有り。是れ則ち或いは三時代謝するに由り。或いは根機の利鈍に由りて爾り。若し実に正像の異無くんば、豈に此の如きの不同有らんや。請い之れを問うて曰く、『金剛頂経』に云く、(17)

仏言わく、本尊を持誦観念して瑜伽を修する者は、皆前の諸三摩地契に由りて現身に種種の功徳を獲得す。前の願悉地の如く行に従いて闕かざれば、十六生に至りて畢定して成仏すと已上。

『大日経』の疏第三に云く、(18)

此の中に悉地宮と言うは上中下有り。上は謂く密厳仏国、三界を出過して二乗の所得の見聞に非ず。中は謂く十方の浄厳。下は謂く諸天修羅宮等なり。若し行者三品の持明仙と成らん時、是の如きの悉地宮の中に安住す已上。

『同』第八に云く、(19)「若し人、秘密蔵の中に於て灌頂位を受くる者

(17) 出典未詳。覚超『金剛三密抄』(『正蔵』七五・六九一中～下)に同文あり。

(18) 出典未詳。宥海『大日経疏鈔』(正蔵六〇・三四六中)に同文あり。

(19) 一行『大日経疏』(『正蔵』三九・六六八中)。

は、乃至一生の中に或いは正覚を成ず」上已。『理趣経』の開題に云く、[20]「十六大生乃至現生に成仏すと」上已。『真言問答』に曰く、「今、真言行者の如きは、此の如く観修して幾ばくの生にか成仏するや。対う。一生二生、機に随いて不定なり」上已。異本の『即身義』に云く、[21]

問う。大機小機共に此の教を修せば、二つ共に即身成仏するや。答う。此れ爾るべからず。問う。其の意、何ん。答う。今の意は大機は即身成仏し、小機は後の十六生に成仏すと云うべし。問う。何を以てか知ることを得たる。大機は即身成仏し、小機は十六生を経て成仏すとは。答う。『経』に云く、「此の三昧を修する者は、現に仏菩提を証す」と。此れ即ち大機即身成仏の証文なり。「若し衆生有りて此の教に遇い、昼夜四時に精進に修すれば、現世には歓喜地を証得し、後の十六生に正覚を成ず」と。此れ即ち小機成仏の証文なり。問う。大小の機を簡ばず即身成仏せしめば、勝れたること見つべし。既に速遅有り、何ぞ余宗に殊ならんや。答う。法相等の

(20) 空海『理趣経開題』(『正蔵』六一・六一二上)。

(21) 伝空海『即身成仏義』(『正蔵』七七・三八四中～下)。

宗は三大劫を経るも都て成仏の理無し。今、此の宗の意は、小機も只だ十六生を経て成仏すとは、尚お余宗に勝れたり。問う。何が故ぞ十八生十七生と云わずして、定んで十六生を経ると云うや。答う。十六大菩薩生を経るが故に爾か云うなり已上。

又た云く、[22]

問う。小機は十六生を経る、大機は経ざるや。答う。大機も亦た十六生を経ると云うべし。問う。若し爾らば、何ぞ即身成仏と云うや。答う。大小の機、十六生を経ると云うと雖も、横竪の義あり。故に速遅各殊なり。問う。其の横竪の義の故に速遅各殊なる意、何ん。答う。小機は次第に十六生を経て成仏す。是れ竪の義なり。大機は即身に十六生を経て成仏す。是れ横の義なり。所以に速遅各殊と云う已上。

『秘蔵記』に云く、「真言の菩薩は或いは十六の三昧を一一次第に証し、或いは一三昧を得ると共に十六同時に証す」[23]已上。夫れ此の如きの不同有ることは正しく是れ機根に大小あり、時分に三時有

(22) 伝空海『即身成仏義』（『正蔵』七七・三八四下～三八五上）。

(23) 空海『秘蔵記』（正蔵図像部一・七上）。

るに由りて爾り。学者自量せよ。

問うて曰く、前の文理の難、猶お未だ遮せず、何如。

答えて曰く、夫れ「及達悟已無去来今」の後には三時の不同無しと雖も、「三世修行証有前後」の前には必ず正像の差殊有り。上来出し難ずる所の衆文、皆な是れ「不堕三世無去来今」の意なり。敢て「三世修行証有前後」の文に混淆すること莫れ。凡そ「正像何別」とは「住在月宮」の所見なり。「重如月殿」の文、之れ思うべし。「成仏遅速」とは修生顕得の次第なり。上中下悉の談、之れ察すべし。密行人の云く、[24]

夫れ円蓋西転すと雖も日月東に流る。南斗北に運べども北極移らず。冬天尽く殺(かれ)るとも松栢彫まず、陰気水を凍らせども潮酒は氷らず。

密行の証理、其れ然らざらんや。時、濁濫なりと雖も、焉ぞ成仏すること無からんや。

問うて曰く、既に人有りと聞く。其の人安くに在るや。

答えて曰く、其の人、山林に跡を暗うし、朝市に得を隠す。凡

(24) 空海『秘蔵宝鑰』(『正蔵』七七・三六六中～下)。

人焉ぞ知ることを得んや。且く『菩提心義』に曰く、[25]

若し末法の世に設し此の観を修して即身成仏する人は、亦た応に形を隠して一に常人の如くなるべし。有縁の人に非ずんば誰れか其の仏を見ん已上と。

此の義、啻だ内聖に局るにみに匪ず。外聖も亦た爾り。且く荘子に曰く、[26]

聖人は山林の中に在らずと雖も其の徳隠る。隠るが故に自ら隠れず。古の所謂る隠士は其の身を伏せて見えざるに非ず。其の言を聞きて出さざるに非ず。其の知を蔵して発せざるに非ず。時命大いに誤まれり已上。

疏に曰く、[27]

澆季の時は道を用うること能わず。無為の道復た世に行われず。仮使い道を体る聖人も迹を塵俗に降し、群小に混同して、人知る者無けん。聖徳を韜蔵して能く用い見らるること莫し。朝市に居ると雖も何ぞ山林に異ならんや。時、昏乱に逢うが故に聖道行われず。豈に是れ光を韜て自ら其の徳を隠す

(25) 安然『胎蔵金剛菩提心義略問答鈔』(『正蔵』七五・四七一上)。
(26) 荘子『繕性篇』。
(27) 出典未詳。

か。謬は偽妄なり。その身を伏匿して見えざるに非ず。見ると雖も群を乱さず、其の言を閉じて出さざるに非ず。出すと雖も物に忤(さから)えず、其の智を蔵して発せざるに非ず。発すと雖も眩曜せず。但だ時、謬妄に逢い、命、迍邅に遇う。故に世の汚隆に随いて身を全うし、害を遠ざく上已。

同疏に云く、(28)「夫れ能く物に物たる者は聖人なり。聖人は万境に冥同す。故に物と彼我の降畔無し」上已。同疏に云く、(29)「古人の純樸、道に合する者多し。故に能く外形は物に随い、内心は凝静なり」上已。又た荘子に云く、(30)「聖人は物に処して物を傷らず」上已。同疏に云く、(31)「俗に処し、光を和し、利して害せず。故に之れを傷らず」上已。夫れ大方は隅なく、大音は声希なり。大白は辱(けが)れたるが若く、大直は屈れるが若く、大成は欠けたるが若く、大盈は沖たるが若し。玄徳、玄に同じ。聖に非ずんば孰れか知らん。人の病を知ることは古聖すら亦た難し。凡そ和光同塵は、是れ李老の所談なる者をや。若し此れを以て之れを観れば、即身成仏の人に於ては、設い肩を並べ膝を交ゆと雖も、誰れか之れを知らん。

(28)『南華真経注疏』二四。
(29)出典未詳。
(30)出典未詳。
(31)出典未詳。

問うて曰く、夫れ山、玉を蔵して草木茂し。岳、剣を収めて光彩衝く。躅を尋ねて形を知り、煙を見て火を悟る。即身成仏の人、胡ぞ必ずしも知り叵からんや。

答えて曰く、玉剣心無し。故に相を現す。人倫心を含む。故に弁え叵し。

問うて曰く、書に曰く、「虚名久く立せず、繆旨終に失あり」と。夫れ彼に反して之れを思うに、隠徳の人豈に久く隠れんや。然るに末世の即身成仏の人、或いは現在にもあれ、若しは没後にもあれ、誰れか其の名を留めたること有るや、何如。抑亦(そもそも)た、儘(まま)其の人有りと雖も、只だ是れ巨洋の一滴なるか。又た即ち九牛の一毛なるか。豈に万不一失の大法に等しからんや。奚(なん)ぞ、具縛出離の霊験に同じからんや。凡そ倩(つらつら)案ずるに従上の所談は是れ高論虚腹なるか。亦た有名無実なるか。有道の智人、善く商量せよ。有道の智人、善く商量せよ。此の事、豈に、他の為ならんや。正しく是れ而(なんじ)が為なり。

問うて曰く、密宗の教行に於て三時代謝の相有りとは、正しく

其の現証有りや。

答えて曰く、之れ有り。夫れ余、近く諸方の密人を視聴するに、大いに大空曼荼の妙観を忘れて偏に魑魅を駆けて以て効験と為す。更に十縁生句の解了なくして併しながら現悉を求めて以て本望と為す。是れ其の末代渾濁の現相なり。観師、傷歎して曰く、(32)

朝家簡び定めて其の賞を賜い、学徒競い望んで其の欲を増す。三密の行に暗くして忝くも遍照の位に登り、毀戒の質を餝(かざ)りて誤りて持律の職に居せり。已上

又た『大宋高僧伝』金剛智三蔵の讃に曰く、(33)

系して曰く「五部曼拏羅の法は鬼物を摂取す。必ず童男処女に附麗して、疾を去りて、祆を除くことなり。絶易なり。近世の人、之れを用いて身口の利を図るに、乃ち徴験寡(すく)なし。率(おおむ)ね時の為に慢ぜらる。吁(ああ)、正法の醨薄、一に此れに至る。已上

と。

又た『遍年通論』第十六に云く、(34)

東晋の尸利密より已降(このかた)、秘呪を宣訳す。其の大帰を要するに

(32) 永観『往生拾因』（浄全一五・三九四上）。
(33) 『宋高僧伝』（正蔵五〇・七一二上）。
(34) 祖琇『隆興編年通論』（卍続蔵七五・一八六下）。

鬼神を祀り邪妄を駆り、人の為に災を禳(はら)い、患を釈(と)くに過ぎざるのみ。其の間、往往仮名の比丘無きにあらず。外国より来りて術を挟みて愚を驚かす。所謂、羅漢法という者有り。正しく幺麼(こうも)の邪術、下劣の技なり。亦た猶お道家の雷公が法の類のごとし。茲れ豈に高道・巨徳・弘禅・主教者の歯(たくい)ならんや已上。

夫れ設い無畏金智の門室に入りて、両部灌頂の壇上に登ると雖も、唯だ天等を祀り、烏鬼のみを駆りて、阿字本際の解証無くんば、彼と異なること無かりけん。密人慎めや。密人慎めや。

又た『吽字義鈔』に云く、(35)

問う、真言の行者、遮情の観、其の委しき意、如何。答う、此の問、殊に至要なり。所以は何ん。末代近世の真言の行人、瑜伽深奥の法を習うと雖も、都て勝義無性の観を忘れたり。所以に三毒五欲の著心未だ蕩(と)らけず、名聞利養の奔波是れ繁し。三密相応の水、念風起りて静まり難く、五相成身の月、妄雲掩(おお)うて晴るること無し。只だ教理の独り諸乗に超えたる

(35)『吽字義鈔』、出典箇所確認できず。

に誇りて、未だ妄染常に浄心を汚すことを知らず。適(たまたま)世間の著心を離ると雖も、亦た未だ出世の攀(はん)縁を覚せず。所謂知法の者は法に著し、有行の者は行を執する等なり。是れ則ち無住の住に背き、不行の行に違するが故に、善巧の修行とは名づけず。況や復た、諸仏無上の秘宝を伝えて名利の価と為し、三三平等の妙行を修して還りて勝他の媒と為さんや。抑(そもそも)中古より以来当時に至るまで、真言瑜伽の行者多く魔所に趣いて出離を得ず。或いは終焉の時、狂を発して正念を失い、或いは夭亡の後、人に託して邪正を顕す。窃かに其の人を聞くに、皆な是れ往日の賢哲なり。此の如きの先踪、自門他門、相続して絶えず。不審し観念、何なる過失を帯してか真正の菩提を得ざるや。知らず、軌則何なる方便を闕いてか徒らに邪魔の業因と成るや。上古の明徳尚お以て此の如し。末世の行者恐れずんばあるべからず。方に今、倩(つらつら)事の情を案じ、偸(ひそか)に思慮を廻らすに、疑わくは是れ教に遇いて即ち精進修行し宗を学びて循環研覈(かく)すと云うと雖も、菩提心の法幢

未だ立せず。解行倶に真実ならざるが故に上已と。

衆文多と雖も、今一を挙げて諸を顕す。覧んと要する者、焉れを閲よや。抑上来の文意を案じ現在の行人を見るに、遮那の教行に於て正像の差異に在ること、現文に載せて維れ炳炳たり。眼前に見えて維れ昭昭たり。誰れの人か爾らずと云わんや。孰れの彙いか頷許せざらんや。行人自量せよ。智人自量せよ。

敬いて遮那大教の行者等に白して言く、且く末代難証の密行を閣いて、早く今時易行の尊号を持したまえ。若し爾らば悉地を安養の浄厳に遂げて、覚華を阿字の心地に開かんこと尤も幾きに在らん者か。夫れ意みれば、三時代謝し烏焉馬と成りて、済生化度の力用を失すること、譬えば強弩の窮矢の魯洲の縞を穿たざるが如し。又た浄摩尼珠の極濁の水を清まさざるに似たり。智者商量して修行せよ。若し末法の中に於て顕密事理の業因を修して現生の透徹を求むるは、角を搉みて乳汁を求むるに更に得る所無きが如し。行人自量せよ。時に密行の人、竪に点頭して去りぬ。夫れ、風、沙羅双樹林の杪を慘み、波、阿夷羅跋提河に咽びしより

以往(このかた)、聖道の諸教は漸漸に殄滅(てんめつ)し、浄土の一宗は倍倍に偏増す。

経に云く、[36]

仏、阿難に告わく、汝、好く是の語を持せよ。是の語を持せよとは、即ち是れ無量寿仏の名を持せよとなり上已。

高祖の解釈、之れを受けて云く、[37]

「仏告阿難汝好持是語」というより以下は、正しく弥陀の名号を付属して遐代に流通することを明かす。上来、定散両門の益を説くと雖も、仏の本願に望むるに、意衆生をして一向に専ら弥陀仏の名を称せしむるに在り上已と。

本朝の祖師、経を受けて釈して云く、[38]

行者、応に知るべし。亦た此の中に遐代とは『双巻経』の意に依るに、遠く末法万年の後の百歳の時を指すなり。是れ則ち遐(とお)きを挙げて迩(ちか)きを摂するなり。然れば則ち法滅の後猶お以て然り。何に況んや末法をや。末法已に然り。何に況んや正法像法をや。故に知んぬ、念仏往生の道は、正像末の三時及び法滅百歳の時に通ずることを上已。

(36)『観無量寿経』(浄全一・五一)。
(37) 善導『観経疏』(浄全二・七一下)。
(38) 法然『選択集』(『昭法全』三四四)。

又た観師云く、[39]

今云く、一たび弥陀仏を称するに無量の罪を滅すとは、一の良薬の万病を治するが如し。謂く、呵梨勤は遍く一切の病を治す。所以に耆婆が亡せしとき、一切の薬草皆な啼く。呵梨勤は独り歌う。余草は識り難し。熱を治して冷を治せず。冷を治して熱を治せず。若し是れ呵梨勤は遍く一切を治す。人、識らざること無し已上。

夫れ小邑を治むるに、何ぞ須らく大道を用うべけん。末代を化するに豈に聖道を示すべけんや。所以は何ん。聖道の諸教は只だ在世正法の機を利して末法万年の輩に及ばず。又た、上根上智の人を度して下根下智の彙いを済わず。然るに浄土の一行は、在世正法の時をも度し、末法万年の機をも簡ばず。上根上智の人をも化し、下根下智の類いをも簡ばざるが故なり。彼の梨勤、独り歌い、余草同じく啼けること法に合して知るべし。抑宜(そもそもむべ)なるかな。玄冬素雪の寒朝には松栢椿葉独り君子の霊徳を彰わし、末法万年の当今は安養の教行のみ特に利物の佳名を播すこと、有識の智人誰か

(39) 永観『往生拾因』（浄全一五・三七八下）。

然らずと云わんや。抑(そもそも)当今末法、五濁悪世の時、自他の密修を見聞す。舞曲と伎楽と調わず。郢鼻と匠斧と相い乖けり。若し未だ大空曼荼の妙解を生ぜず、本不生際の用心に住せずんば、設い口に大陀羅尼を誦すと雖も、焉ぞ樵夫牧童に異ならんや。設い手に諸尊の印契を結ぶと雖も、孰れか傀儡戯弄を免れんや。是の故に、当代末法の修行は多くは是れ遠生の与(ため)に縁と作るのみ。豈に超公の『成身記』にも云わざるや。(40)

速やかに成仏せんと欲せば、当に成身観を学すべし。然るに我等教門を披くと雖も義理を識(さと)り難し。敢て頓証を期せず。只だ遠縁を結ばんと欲す。故に堅高に於て強く鑽仰を企つ。願わくは、射的の喩えの如くして、漸く此の観月の志を遂げん已上と。

上賢、猶お爾り。況んや下愚に於てをや。夫れ今広く顕密の修者を見るに、只だ徒らに口頭を囀るのみ。言と心と相い乖けり。行者等、若し冷暖自知せば、闇(なん)ぞ恥慙せざらんや。心を測りて教文に置け。空しく睡りて寐語(げいご)すること莫れ。縦い法の如く解し、法

(40) 覚超『五相成身私記』(正蔵七五・七八三中)。

の如く行ずと雖も、自力難行なるが故に、証位猶お未だしからん。智人自量せよ。

夫れ今時難証の聖道を以て濁世末代の魯鈍を化すべからず。若し強いて之れを化せば、当に宋人木を伐り、猿狙衣を裂くなるべし。尤も慎しむべき者をや。若し聖道の行人有りて格外の玄談を聞きて、徒らに訶怪誕該せるは、是れ即ち賓鳥膳楽に眩めき、鼷鵌(けいあん)車馬に驚くの謂いか。

円宗密行の人難じて曰く、今現に見るに、其の人無し。豈に耳を信じて目を賤しうすべけんや。請い問う。

答えて曰く、『法華』に「後五百歳如説修行」[41]と説けるは、是れ或いは「常在人天受勝快楽」[42]の幻報を挙げ、或いは「即往安楽生蓮華中」[43]の果報を示すのみ。全く真修体顕の巨益を宣ぶるにあらず。「末法之初冥利不無」[44]とも定め、「後五百歳遠沾妙道」[45]とも判ず。此の意なり。冥利遠沾の語、学者之れを思択すべし。『般若』[46]の後五百歳の流布も亦た之れに同じ。設い又た、後五百歳の化益を明かすと雖も、是れ今より僅かに二百年なるべし。以後

(41)『法華経』(正蔵九・五四中～下)。
(42)伝龍樹『菩提心論』(正蔵三二・五七二下)。
(43)『法華経』(正蔵九・五四下)。
(44)湛然『法華文句記』(正蔵三四・一五七中)。
(45)智顗『法華文句』(正蔵三四・二下)。
(46)『金剛般若経』(正蔵八・七五〇中)。

九十五百祀の間の法味の滋醑、利物の篤薄、其れ之の如し、何ん。

原(たず)ぬるに夫れ、第三時の中に於て難行を行じて聖果を得まく欲する者は、譬えば角を挿て乳を求め、沙を圧して油を索むるに、乳油得べきこと難きが如く、亦た石女に通じて子を願い、湿木を攢(お)りて火を望むに子火得べきこと難きが如く、相い似たらん。若し道人有りて、尊号を持して、浄刹に往かんと欲する者は、喩えば乳を挿りて汁を欲し、麻を圧して油を索むるに、汁油得べきこと易きが如く、亦た、精米を蒸して飯を願い、乾薪を攢(あつ)めて火を求むるに、飯火得べきこと易きが如く、相い似たらん。斯の義、愚人の知るべからざる所なり。強明卓抜の識を負い、生死変化の数(ことわり)に達せるの人は、能く之れを悟るべし。智者商量せよ。

請い問う。曰く、「刀兵劫中作大事」と説き、「八千年中付属諸王」と宣べたるは、仁王は是れ七難の消滅を挙げ、悲華は乃ち三乗の結縁を語す。今は正しく出離解脱の勝利に約して以て言を為す。相い似ざること懸隔なり。同年にして之れを語るべからず。夫れ万年の中、繫属結縁と三災の時の出離解脱と相対比挍して、以て

商量せよ。於(ああ)、孰れの家の運載にか手脚繚戻の者の為に、済度猶お垂れたるや。何れの処の汲引にか、当今末法の時に至りて、縑緗尚お舒べたるや。然るに、吾家の輅舶は、五濁極増の世を抜済し、我門の墳籍は三学無分の人を引く。誰れか帰仰せざらん者ぞや。抑(そもそも)、三蔵半満の法令を製して、以て三根の有情を化し、四曼十乗の格式を造りて、以て六趣の群萌を導くことは、正しく是れ在世正法の上機に被ればなり。若し彼の遮那止観の大法を以て、当今末法の鈍機を摂せば、猶お伯楽の図を察して、騏驥を市に求むるが如く、又た柱(ことじ)に膠して、瑟を調べ、舷(ふなばた)を契(きざ)んで刀を索めしが如し。又た魚を沸鼎の中に養い、鳥を烈火の上に栖しむが異ならず。又た強弩を機(あやつ)りて以て鷦鷯を射、牛鼎を傾けて以て鶏雉を烹るが如し。伏して請う、大善知識等、金師が子に対して、不浄観を説くこと莫れ。浣衣の女に対して、数息観を示すこと勿れ。慎しむべし、慎しむべし。若し又た、中下の根機有りて、入聖の険路に趣かば、譬えば表を曲げて影を直せんと欲し、却(しりぞ)き行きて前に及ばんことを求むるに似たり。又た轄無きの車に載りて、以

て千仞の谷に臨めるが如く、又た猶川を渉るに梁無く、虚(そら)を淩いで翼を失うも、轅を北にして楚に適(ゆ)き、轅を南にして晋に適くがごとし。然れば則ち、今博く八挺の道人を見聞するに、一乗の妙典を誦するの者も初縁実相の解行無く、五部経軌を持つの彙いも阿字大空の観念を忘れたり。何ん為れぞ無忘なるや。夫れ実相は無相にして実相を遠離し、阿字は有相にして阿字を勦絶せり。此れ等の寂理智光、難解難入なるが故に、初心創稟の行者未だ曽て心を措(お)かず。故に成仏の下種を闕き、熟脱の巨益を失えり。若し、下種熟脱の三徳無くんば、奚んぞ流来生死の四有を絶たんや。有道の人省察せよ。夫れ末代悪世の行人等、只だ聞信解行の四位に泥滞して、未だ断惑証理の高科に登らず。是れ時機相感せざる所以なり。譬えば臘月の麦穂、実、熟(あから)まず、仲秋の紫筍、成長せざるが如く、又た無射の梨華、応鐘の桃華の倶に菓実を結ばざるに似たり。此の四物、長熟せざるは、是れ其の季節を得ずして、生出せる故なり。末代聖道の修行、彼に準じて知るべし。若し人有りて、難行の門を出でて易行の路に入らば、白骨再び肉つき、枯

樹重ねて華(はな)さく物か。凡そ末世の時に於て念仏を勤むるは鎧を著て陳に交るが如し。万年の今に在りて顕密を修するは、白身(すはだ)にして讐を禦(ふせ)ぐに似たり。若し人、二死の怨賊を禁ぜんと欲せば、必ず弘誓の堅鎧を著て、六字の利剣を提げたるなり。高識の智人自ら思量せよ。

問うて曰く、当今末法の時に於て盛んに五分法身の妙行を勤むる者、惟れ多し。謂く、其の律寺を見れば、五篇七聚の戒行を持って宛も浮嚢を惜しむが如く、三聚十重を守ること猶し油鉢を持つに似たり。其の禅院を聞けば、四時坐禅し、晨昏参学して、虚往実帰するの彙、一に非ず。其の教寺を見れば、循環研竅して聞慧を究竟し、入三摩地して、修慧を発得す。是れ眼前の事なり。若し爾らば、奚ぞ末法の中に戒定の行無しと言わんや。

答えて曰く、仁者の言、乍ち聞けば是に似れども、熟(つらつら)思えば天(はるか)に殊なり。夫れ燕石珠に濫し、璞鼠、名渉る。名実相い濫すること由来尚(ひさ)し。然れば則ち、梵延が仏号、未だ三覚円満の義相を知らず、犢子が絶言、猶お言亡慮絶の中道に暗し。縦い戒定の行

有りと雖も、菴果熟し難く、魚子長じがたきが如く、相い似たるが故に修者は千万ありと雖も得者は一二も無からん者か。若し爾らば、只だ是れ相似の三学なるか。亦た即ち仮名の定慧なるか。蓋し行ずることの難には非ず。能く証することの難きなり。夫れ意(おもんみ)るに、陶(すえもの)の犬、豈に夜を守らんや。

尾の雞辰(とき)を司どらんや。蚊虻焉ぞ階序を越えんや。蟷蜋争(いか)でか隆車を禦(ふせ)がんや。高識卓抜の大智人、自ら商量せよ。

難じて曰く、今汝、論を造りて大いに他を破して自らを立す。豈に謗人訕法の過を招かざるべけんや。

答えて曰く、夫れ造論の用心、偏に是れ慈悲済生を以て、以て本と為し、利物化他を以て、以て先と為す。善く能く這(こ)の意に住して、以て浅執を破して深教に入らしむれば、利益最も広し。若し名利心を挾んで以て諂詐(とうさ)に住して深法を無みせば、斯の尤(とがめ)を免れず。

難じて曰く、夫れ密教は是れ自覚聖智の修証の法門なり。円宗は亦た仏知仏見の甚深の秘蔵なり。禅門は是れ教外別伝見性成仏

の極要なり。華厳は廼(すなわ)ち如来内証、別教一乗の奥邃(おうすい)なり。三論は亦た八不中道、一念不生の大法なり。法相は即ち万法唯心、心外無法の中宗なり。然るに今、此れ等の大乗至極の法要を以て、或いは三学域内と下し、或いは今時難証と訕(そし)れり。若し爾らば、此れ専ら自法愛染の故に、他人の法を毀呰(きし)すること持戒行の人と雖も未だ地獄の苦を脱せざるの過失を得ん者か、何如。

答えて曰く、孰れか言う。従上の諸教皆な是れ浅略の疎法なりと。但し機根に牽かれて逆流惟れ難し。故に云うのみ。仁者法体に約して以て疎略の権法に属すと謂うこと勿れ。

請い問う。曰く、今現に自他の行者等、破禁の塵深くして十重尸羅の玉を塡(うず)み無慙の雲厚くして三覚円明の月を隔てたり。智人眼を著けて見よ。或いは又た、少在属無くして今時証無と曰うなり。誰れか全無と云わんや。此の義乍ち知り難くば、今当に秦鏡を攬りて以て爾(なんじ)の面に臨むべし。其の秦鏡とは、第一と当章との明文、是れなり。抑(そもそも)当代、円密群英の行相を見聞するに、全く照機鑑物の法眼無くして、只だ一乗三密の深理を高ぶり説きて、

未だ教法機根の応不を顧みず。譬えば、「鉤頭の意を領せずして、錯って定盤星を認むる」[47]が如く、相い似たり。故に二利倶に失し、両悉同じく亡す。孰れか此人を指して智慧慈悲方便具足の大善知識と言わんや。

問うて曰く、夫れ念仏の一行は易行易修にして感応簡易ならば、十劫以来の一切衆生等、盍ぞ皆な浄刹に往生することを得ざるや。

答えて曰く、一子の慈悲、是れ平等と雖も、所化の群類の廻心と未廻との不同に依りて爾り。夫れ、火、景を焚かず、寒、風を結ばず。匠、水を断たず、冶(や)、水を鋳ず。盗跖、仲尼大聖の五常を受けず、調婆、薄伽婆帝の教法に順わず。此等の諸物、変化せざること豈に能化の人の過失ならんや。化せざることは、只だ境に在るのみ。古えに云く、[48]「嘉肴有りと雖も、食わざれば、其の甘きことを知らず。至道有りと雖も、学びざれば其の善を知らず」とは、此れ自力難行の学者の他力微密の玄極に帰せざるの謂いか。智人自量せよ。抑(そもそも)当論一百箇篇は皆な是れ述して作せず。

(47)『碧巌録』（正蔵四八・一四一下）に同文あり。

(48)『礼記』「学記」（中国哲学書電子化計画 https://ctext.org/dictionary.pl?if=gb&id=10101 二〇一八年一〇月四日閲覧）。

学者若し琢磨に竄(いしま)有らんと欲すとも、瑕玷を玉人に譲ること莫くして、鑽仰すること再びにし、三たびにせば、定んで拠(よりどころ)を経典に得て方に指を滋味に染めん。

後生等太早にすること勿れ、疎忽にすること莫れ。若し太早疎忽に訕言を吐かば、駟追(しつい)すとも舌に反えらざらんのみ。噫乎(ああ)、上首の輩は殺鬼の為に呑まれ、下首の類は風霜の為に侵さる。有情非情倶に常無く、依報正報同じく転変す。南無阿弥陀仏。

具結得脱勝第四

夫れ見思の麁惑を断ちざれば、分段の繁業、截り難く、無明の細惑を除かざれば変易の生死離れ叵(かた)し。故に如来、三乗の窮子を憫れんで、驚きて火宅の門内に入りたまい、空観を教えて以て浮麁の随眠を除かしめて、中道を観ぜしめ、以て沈隠の無明を断ぜしむ。然りと雖も、若し空観風弱くして水上の油を吹かざれば、三界の沈落、猶予有るべからず。若し中観口緘(とじ)て、水中の乳をすわざれば、二転の妙果証期あるべからず。且く『大日経疏』第

十九に云く、[49]

慧を以て唯無明を害し、言説を離れたる自性、自証智を此れは是れ如来なりと説くというは、此れは如来の名を答す。此の慧は能く無明を害す。故に慧害と云う。無明と云わずと雖も然も所害とは、即ち是れ無明なり。其の義、自ら顕わなり上已。

字母の頌に云く「真言は不思議なり。観誦すれば無明除かる。一字に千理を含み、即身に法如を証す」[50]上已と。亦た、円宗の大師云く「見惑を破するが故に四悪趣を離れ、修惑を破するが故に三界の生を離る」[51]上已と。『摩訶止観』の第六に云く「初めに見仮を破するは正しく是れ初信なり。第二信従り第七信に至るまでは、是れ思仮を破す」[52]上已。『輔行』の第七に云く、[53]

五品に已に能く円に五住を伏す。豈に此の位に至りて別に見思を断ぜんや。但だ是れ円修して麁惑先ず断ず。猶し鉄を冶するに麁垢先に除くがごとし上已。

釈籤に云く「三惑を破して、妙慧、方に遍すと」[54]上已 夫れ顕密権

(49) 一行『大日経疏』（正蔵三九・七七九上）。
(50) 一行『字母表』、空海『般若心経秘鍵』（正蔵五七・一二中）に孫引きあり。
(51) 湛然『止観輔行伝弘決』（正蔵四六・一七一中）。
(52) 智顗『摩訶止観』（正蔵四六・七三上）。
(53) 湛然『止観輔行伝弘決』（正蔵四六・三八五上）。
(54) 湛然『法華玄義釈籤』（正蔵三三・八八八下）。

実の不同に依りて体達対治の差降有りと雖も、正しく断惑証理の義相を明かすことは、千車轍を共にし万流酽会する者か。爰に牟尼の秋月既に本覚の山に隠れ、慈尊の春華未だ機縁の林に綻ろびず、吾等、二尊の中間に於て、三障の雲翳、厚く覆いて尸羅清涼の桂月明らかならず。五濁の逆浪悪く翻りて円密禅那の慧水澄みがたく、四住眩きて如来の知見を失い、四魔誑て究竟の菩提を隔てたり。然るに欣求浄土の機根を案ずれば、是れ逆謗犯重の悪人にして全く一糸毫の惑障をも伏除せず。既に弥陀覚王の大願業力に乗じて、無漏無生の微妙の報土に生じたれば、有漏の色質の上に無漏の徳用を備え、分段の依身の体に変易の功徳を具せり。是れ即ち巨石も大船に置きたれば速かに大海を万里に過ぎ、蚊虻も鳳翅に附すれば蒼天を九空に翔けるの謂いか。此の義は諸教の語らざる所にして、啻だ吾が浄教不共の所談なり。此の旨は諸師の絶離するところにして、特り我が大師尊者の所立なり。鼻祖神鸞菩薩云く、(55)

此れいかんぞ不思議なる。凡夫の人煩悩成就すること有れど

(55) 曇鸞『往生論註』（浄全一・二四一上）。

も亦た彼の浄土に生ずることを得れば、三界の繋業畢竟して牽かず。則ち是れ煩悩を断ぜずして涅槃の分を得。思議すべけん已上。

又た黒谷の尊師云く、(56)

天台真言は皆な頓教と名づくと雖も、断惑証理するが故に猶お是れ漸教なり。未だ断惑せざる者なりと雖も三界の長迷を出過するが故に、此の教を名づけて頓中の頓と為す已上。

啻だ五蓋十纏を具し、横に三界六道を截るのみにあらず。亦た罪障未だ尽きざるに、尚お、分段生死を離るることを得るが故に、始祖玄簡大士云く、(57)

声をして絶えざらしめ、十念を具足して南無無量寿仏と称せしむ。仏名を称するが故に、念念の中に於て八十億劫生死の罪を除いて、命終の後、金蓮華の猶おし日輪の如くにして、其の人の前に住するを見て、一念の頃だの如くに即ち極楽世界に往生することを得。蓮華の中に於て十二大劫を満じて、蓮華方に開く当に此れを以て五逆の罪を償う。

(56) 法然『無量寿経釈』（『昭法全』六八）。
(57) 曇鸞『往生論註』（浄全一・二三五上）。

又た宗家大師判じて云く、[58]

華に乗じて一念に仏国に至り、直ちに大会仏前の池に入る。残殃未だ尽きず。華の中に合て十二劫の後、始めて華開く。華内に坐する時、微苦無し。色界三禅の楽に超と過せり上已と。抑何れの教にか猶お随眠を具して生死の長夜を出ずとは談ぜるや。又た誰れの師か未だ罪障を尽くさずして有海の沈淪を免ると云うことを許せるや。高識の智人自ら二教の殿最を商量せよ。夫れ、たとい、耳、鍾鼓管籥の声を営み、口、芻豢醪醴の味に嗛きて、以て其の意を感じ、以て厥の身を楽しむとも、白骨と成らんこと今に在りけん。黄泉に沈まんこと、明に在り。あゝ、痛ましいかな。『摩訶止観』に云く、[59]

溘然として長く往きぬ。所有の産貨、徒らに他の有と為んぬ。冥冥として独り逝く。誰か是非を訪わん上已と。

若し、人、楚毒の籠檻を出でて、安楽の太虚に遊ばんと欲せば、早く口を開きて尊号を唱え、心を運びて浄刹を欣え。夫れ華山の蓮華は之れを服する者の羽と化し、方朔が雲露は之れを嘗むる者

(58) 善導『般舟讃』（浄全四・五四五下）。
(59) 智顗『摩訶止観』（正蔵四六・九四下）。

の老いを反えす。名号を持つの倫は、西方の大仙と成り、念仏を唱うるの彙いは、河沙の大寿を感ず。南無阿弥陀仏。

具縛不現勝第五

夫れ忉利円生の妙香は、順風逆風同じく熏芬し、随眠成就の凡夫は、歴縁対境するに、即ち現起す。若し煩惑現起すれば、定んで不善の業を造作して、必ず畏途の中に堕在す。然るに一切善悪の索多、若し大願宝輅に乗じて、西方浄刹に生ずることを得れば、善趣已前の異生等、未だ毫芒の伏断二智をも起こさずと雖も、随眠全く現行すること無し。是れ誰が力ぞや。只だ是れ我が弥陀大我、超世別願の不思議力なり。漏染不起の別願、并びに受楽無染の本誓の意、思いて知ぬべし。経に、或いは目に其の色を覩、耳に其の音を聞き、鼻に其の香を知り、舌に其の味を嘗め、身に其の光を触れ、心に法を以て縁ずるに、一切皆な甚深法忍を得て、不退転に住し、仏道を成ずるに至るまで、六根清徹にして諸の悩患無しと宣べ、或いは此の食ありと雖も、実に食する者無し。但

だ色を見、香を聞くに、意に食なりとおもえば自然に飽足す。身心柔軟にして味著する所無しとも説けり。此れ等の諸文は、皆な具縛不現の相を明かすものなり。又た初祖玄簡大士の云く、[60]

自然の徳風、徐(ゆる)く起きて、微動して其の風調和にして、寒からず、暑からず。温涼柔軟にして、遅からず、疾からず、諸の羅網及び衆の宝樹を吹くに、無量の微妙の法音を演発して、万種の温雅の徳香を流布す。其れ聞くこと有る者は塵労垢習自然に起らず、風其の身に触れれば皆な快楽を得。此の声仏事を為す。焉ぞ思議すべけんや[已上]と。

又た『註十疑論』に云く、[61]

問う、具縛の凡夫、悪業厚重にして一切の煩悩、一毫も未だ断ぜず。西方浄土は三界を出過せり。具縛の凡夫、云何んが往生することを得んや。答えて曰く、二種の縁有り。一には自力、二には他力なり。自力とは此の世界に在りて、道を修するとも実に未だ浄土に生ずることを得ず。是の故に『瓔珞経』に云く「始め、具縛の凡夫従り未だ三宝を識らず。善悪

(60) 曇鸞『往生論註』(浄全一・二四三上)。
(61) 澄彧『註浄土十疑論』(浄全六・五八四下～五八五上)。

の因と果とを知らず。初て菩提心を発すには、信を以て本と為し、仏家に住在するは戒を以て本と為す。菩薩戒を受けて、身身相続して戒行闕けずして一劫二劫三劫を経て始めて、初発心住に至る。是の如く修行して、十信 一には信心・二には進心・三には念心・四には定心・五には慧心・六には不退心・七には戒心・八には護心・九には願心・十には廻向心なり、十波羅蜜等 一には施・二には戒・三には忍・四には進・五には定・六には慧・七には方便・八には願・九には力・十には智なり若し六度を説かば・六に後の四を摂す・若し十度を開せば・第六に唯だ無分別智を摂す・後の四は皆な徳智の摂なり・又た後の四度は・前の六度を助けて・円満することを得せしむ・方便は前の三度を助け・願は進を助け・力は禅を助け・智は般若を助くるなり梵には波羅蜜と云い・此こには到彼岸とも・到は即ち彼岸に到るなり・彼岸に二種有り・一には十度を行して究竟するを到彼岸と名づけ・二には生死を此岸と為す・煩悩を中流と為し・涅槃をば彼岸と為す・謂

く此の十度を行じて・菩提涅槃の二転依の果を得るを名づけて彼岸となす 無量の行願、相続無間にして、一万劫を満じて、方に初て第六正心の住に至る。若し更に増進すれば、第七不退住に至る。即ち種性位 十住とは・一には初発心住・二には持地住・三には修行住・四には生貴住・五には具足方便住・六には正心住・七には不退住・八には童真住・九には王子往・十には灌頂住なり・広く説かば華厳瓔珞等の如し なり。此れは自力に約す。此の具縛の身、卒(すみや)かに未だ浄土に生ずることを得ず。他力とは、若し阿弥陀仏の大悲願力の念仏の衆生を摂取したまうことを信じて、即ち能く菩提心を発して念仏三昧を行じ、三界の身を厭離し、行を起し、施戒修福して、一一の行の中に於て廻向して、彼の弥陀の浄土に生ぜんと願ずれば、仏の願力に乗じて、機感相応して即ち往生を得るなり。是の故に、『十住毘婆沙論』に云く「此の世界に於て、道を修するに二種有り。一には難行道、二には易行道なり。難行道とは、於五濁悪に世に在りて、無仏の時に於て、阿毘

跋致を求むるに阿毘跋致、此には不退転と云う、甚だ得べきこと難し。乃至 易行道とは謂く仏語を信ずるが故に念仏三昧をもて浄土に生ぜんと欲せば、仏願力の摂持したまえるに乗じて決定して往生すること疑わざるなり。人の水路を行くに、船力に因るが故に須臾に即ち千里に至るが如きを他力と謂うなり。譬えば、劣夫の転輪王に従えば、一日一夜に四天下を周行するが如し。是れ自力にあらず、転輪王の力なり上已と。

亦た、信師云く、(62)

此れ等の所有の微妙の五境は、見聞覚者の身心を適悦せしむと雖も、有情貪著を増長せずして、更に無量の殊勝の功徳を増す。凡そ八方上下無央数の諸仏国中に極楽世界の所有の功徳、最も第一なりとし、二百一十億の諸仏の浄土の厳浄の妙事を以て皆な此の中に摂在せり上已。

夫れ意みれば、一たび五塵の境界に触るれば、永く三悪の楚毒を呑むこと必せり。且く『法華』(63)に云く、

(62) 源信『往生要集』(浄全一五・五八上)。
(63)『法華経』(正蔵九・一三上)。

亦た、五欲の財利を以ての故に種種の苦を受く。又た貪著追及するを以ての故に、現に衆苦を受け、後に地獄畜生餓鬼の苦を受く。若しは、天上に生じ、及び人間に在りて、貧窮困苦、愛別離苦、怨憎会苦、是の如き等の種種諸苦、衆生其の中に没在すれども、歓喜遊戯して、覚らず知らず、驚かず怖れず、亦た、厭いを生ぜず解脱を求めずして、此の三界の火宅に於て東西に馳走して、大苦に遭うと雖も、以て患とせず。乃至 汝等楽いて三界火宅に住すること莫れ。麁弊の色声香味触を貪ずること勿れ。若し貪著して愛を生ずれば、則ち為に焼かる。汝等速かに三界を出でよ上已と。

又た『摩可止観』(64)に云く、

此の五欲の過患をいわば、色は熱金丸の之れを執れば則ち焼くが如く、声は毒塗鼓の之れを聞けば必ず死するが如く、香は弊竜気の之れを嗅げば則ち病めるが如く、味は沸蜜湯の之れを呑めば則ち爛るるが如く、蜜塗刀の之れを舐れば則ち傷むが如し。触は臥獅子の之に近づけば則ち齧むが如し。此の

(64) 智顗『摩訶止観』（正蔵四六・四四上）。

五欲は、得て之れを厭うこと無し。悪心転(うた)た熾んなること、火に薪を益すが如し。世世に害を為すこと怨賊よりも劇げし。累劫より已来た、常に相い劫奪し、色心を摧折す。今方に、禅寂するに復た相い悩乱す。深く其の過を知れば貪染伏息す。事相は具さに禅門の中の如し云云。上代の名僧の詩[76]に云く、

之れ遠ければ士と為ること易し、之に近ければ情を為すこと難し。香味、高志を頽(くだ)く。声色軀齢を喪す上已と。

又た『遺教経』[65]に云く、

汝等比丘、已に能く戒に住す。当に五根を制して、放逸に五欲に入らしむること勿かるべし。譬えば、牧牛の人の杖を執りて之れを視せしめ、縦逸に人の苗稼を犯さしめざるが如し。若し五根を縦(ほしいまま)にすれば、唯だ五欲の将に崖畔無うして制すべからざるのみに非ず。亦た悪馬の轡を以て制せざれば将当(まさ)に人を牽きて坑坎に墜すが如し。劫害を被るがごときは、苦、一世に止まる。五根の賊は、禍殃、累世におよぶ。

(65)『遺教経』（正蔵一二六・二八五上）。

害を為すこと甚だ重し。慎まんはしかあるべからず。是の故に、智者は制して随わず、之れを持つこと賊のごとくにして、縦逸ならしめず。仮令い之れを縦にすれども皆な亦た久しからずして其の磨滅を見ん。此の五根は、心を其の主と為す。是の故に汝等当に好く心を制すべし。心の畏るべきこと毒蛇、悪獣、怨賊、大火の越逸するよりも甚だし。未だ喩とするに足らず。譬えば、人有りて手に蜜器を執りて動転軽躁して但ただ蜜のみを観て深坑を見ざるが如し。又た、狂象の鉤り無く、猿猴の樹を得て騰躍踔躑して禁制すべきこと難きが如く、当に急に之れを挫きて放逸ならしむること無かるべし。此の心を縦にする者は、人の善事を喪う。之れを一処を制すれば、事として弁ぜずと云うこと無し。是の故に比丘、当に勤めて精進して、汝が心を折伏すべし已上と。

加以、『普賢観』『大智論』『摩訶止観』等の中に一一五欲の過失を呵す。文、繁きが故に此こに録せず。学者自ら知れ。又た、『荘子』に云く、(66)

(66)『荘子』外篇・天地。

且つ夫れ、性失うに、五有り。一に曰く、五色は目を乱る、目をして明ならざらしむ。二に曰く、五声は耳を乱る、耳をして聡ならざらしむ。三に曰く、五臭は鼻を薫じ、困蜈顙に中る。四に曰く、五味は口を濁らし、口をして厲爽ならしむ。五に曰く、趣舎は心を滑らし、性をして飛揚せしむ。此の五の者は皆な生の害なり已上。

『疏』に曰く、[67]

情を迷わし、性を失うこと抑乃ち端多し。要且して其の数を言うに五有り。五色とは、謂く青黄赤白黒なり。流俗耽り貪りて此れを以て目を乱す。理を見ること能わざるが故に明ならずと曰う。五声とは、謂く宮商角徵羽なり。俗声に淫滞して道を聞くこと能わざるが故に聡ならずと曰う。五臭とは謂く羶薫香鯉腐なり。慢は塞なり。[68]刻賊して通ぜざるを謂う。言は、鼻、五臭に耽る。故に壅塞して通ぜず。顙額を中傷するなり。外書に呼びて臭と為す。故に『易』に云く、「其の臭きこと蘭の如し」と。『道経』には「五香」と謂う。故に『西

(67)『南華真経注疏』巻十四　外篇・天地。

(68)『南華真経注疏』では「慢」が「惶」となっている。

升経』に云く「香味是を寃(あざむ)く。五味とは、謂く酸辛甘苦鹹なり。厲は病なり。爽は失なり。人をして五味に著せしむ。口根を穢濁して遂に鹹苦して痾を成さしむ。舌は其の味を失う。故に厲爽と言う。趣は取なり。滑は乱なり。心に順ずるときは則ち取り、情に違うときは則ち舎(す)つ。其の心を撓乱して、自然の性をして馳競して息まざらしむ。軽浮躁動す。故に飛揚と曰う(已上)と。

夫れ内外の道人、皆な倶に五塵を誡め、同じく三業を清む。然るに今、大願業力に執持せられて安養浄刹に往詣しぬれば、色を見、声を聞く。皆な悉く見仏聞法の因縁なり。香を聞き、味を嘗むるも亦た是れ発心修行の方便なり。故に彼方の五塵は皆な悉く不仮方便、自得心開の良縁たり。是れ誰人の大恩ぞや。豈に如来悲母の厚恩に非ずや。淮犬天上に吠う。[69] 費杖、雲外に飛ぶ。之れと大いに間有り。行者思択せよ。婆伽婆、説て曰く、「世は皆な、牢固ならず。水の沫泡と焔とのごとし。」汝等咸く当に疾く厭離の心を生ずべし。南無阿弥陀仏。

(69) 中国故事。

具纏不退勝第六

夫れ以れば、神鯉、滝水を泝(さかのぼ)ること太だ難く、羅睺、因陀を征すること、亦た難し。此れ則ち、二転妙果の高位昇り難く、五住煩悩の怨賊寃(しえた)げ難きの謂いか。嗚呼、痛ましいかな。五品の菩薩の初依為るや、忽ちに懈(おこた)り屈して、悪趣の衢(ちまた)に廻り、六住の索多の習種為るや。速やかに退沈して闡提の彙いと成れり。然るに今、三学分外、逆謗疏勒[70]の一切衆生等、地蔵菩薩の堅誓に乗じて、一たび金刹酉邦の彼岸に到れば、頓に四不退の高位に登り、早く三菩提の妙果を証するなり。縦使い、還来穢国度人天すれども、匪石の大心矻乎として転ぜず。金剛の信根、確乎として抜けず。曰く敢て問う。

答う、双巻の四十八章の本誓に云く、[71]「設し我れ仏を得たらんに、国中の人天、定聚に住せずして、必ず滅度に至らば、正覚を取らじ」と。同下に云く、[72]「其れ衆生ありて、彼の国に生ずる者は皆な、悉く正定の聚に住す。所以は何ん。彼の仏の国中には諸

(70) 疏勒…「躁動」の誤りかと指摘あり。
(71)『無量寿経』(浄全一・七)。
(72)『無量寿経』(浄全一・一九)。

の邪聚及び不定聚無ければなり」上已と。

又た逝多林中の『無量寿経』に云く、(73)「極楽国土には衆生生ずる者皆な、是れ阿鞞跋致なり。其の中多く一生補処有り」上已と。妙楽の第二に云く、(74)「阿鞞跋致とは、阿とは無なり。跋致とは退なり」上已と。宗師の解釈に云く、(75)

坐する時に即ち無生忍を得。一念に迎えて将に仏前に至る。法侶、衣を将ちて競い来りて著せしめ、不退を証得して、三賢に入る上已と。

又た『念仏鏡』に云く、(76)

阿弥陀経に準ずるに、一日七日の念仏の功徳、無量無辺なり。多功徳に由りて浄土に往生す。浄土に往生しぬれば即ち是れ八地上已の菩薩なり上已。

『群疑論』に云く、(77)

或いは浅行の菩薩、大智増上すら猶お退転有り。苦悩の衆生を悲愍すること有りと雖も、悪縁に遇うに随いて菩薩の行を退して、衆の悪業を造りて菩提心を失う。広く『菩薩本業瓔

(73)『阿弥陀経』(浄全一・五三)。
(74) 湛然『法華文句記』(正蔵二九・一七九上)。
(75) 善導『法事讃』(浄全四・二一下)。
(76) 道鏡・善道『念仏鏡』(浄全六・七一一下)。
(77) 懐感『群疑論』(浄全六・七四上)。

珞経』に法財王子等を説くが如し。此れ即ち二利倶に失し、自他並びに損せるなり。此れに為って、願じて浄土に生ずれば、彼の悪縁を離れて聖尊に親近し、恒に正法を聞きて、諸の菩薩と倶に一処に会す。乃至 念念に増進して退転有ること無し。乃至 是れを以て先ず須らく浄土に生ぜんと願じて、菩薩菩提の根芽を長養して堅牢ならしむべし。縦い悪縁に遇うとも、亦た退転無くして方に斯の浄土を離れて還りて娑婆に生じて、無始沈淪有縁の父母、六親眷属朋友知識、法界の含霊を救摂すべし。此の義、『安楽集』の中に於て、綽禅師、已に広く引けり 等文。

『註十疑論』に云く、(78)

未だ無生忍を得ざる已還及び初発心の凡夫の菩薩は要らず須らく常に仏を離れず、忍力成　就して方に三界の中に処して、悪世の中に於て苦の衆生を救うに堪ゆ。此れが為に菩薩願じて云く、先ず無生忍を証して、然して後に衆生を度せんと。故に『智度論』に云く「具縛の凡夫縛は謂く煩悩、能く

(78) 澄彧『註浄土十疑論』（浄全六・五八一上～下）。

人を纏縛す。凡夫、具さに有するが故に、具縛凡夫と名づく、大悲心有りて、悪世に生じて苦の衆生を救わんと願ぜば、是の処り有ること無けん。何を以ての故に。悪世界は煩悩の境、強くして、自ら忍力無ければ、心、境に随いて転じ、声色に縛せられて、自ら三途に堕さば、焉ぞ能く衆生を救わんや。仮令い人中に生ずることを得るとも、聖道、得難し。或いは、施戒修福に因りて人中に生ずることを得、国王、大臣、長者と作ることを得て、富貴自在にして、縦い善知識に遇うとも、肯べて信用せず、貪瞋放逸なり。故に広く衆罪を造る。此の悪業に乗じて一たび三途に入れば、無量劫を経て地獄従り出でて 地下の獄を名づけて地獄と為す。梵には捺落迦と云い、此には苦具と云う。貧賤の身を受く。若し善知識に逢わざれば、還りて地獄に堕せん。此の如く輪廻して今日に至る。人人皆な是の如し。此れを難行道と名づく。故に『維摩経』に云く「自らの疾い救うこと能わずして、而も能く諸の疾人を救わんや」。又た『智度論』に云く「譬えば、二人各々親

属有りて、水の為に溺れされんに、一人は情急にして直ちに水に入りて救い接せんとす。方便の力無きが故に、彼此俱に没しぬ。一人は方便ありて、往きて船筏を取りて 南人は籜と名づく。北人は筏と名づく。謂く、竹木を編みて、漢河に浮かべて以て人物を運ぶものなり。、之れに乗じて救接するに、悉く皆な水溺の難を脱することを得るが如し」。新発意の菩薩も亦復た是の如し。未だ忍力を得ざれば、衆生を救度すること能わず。此れに為(よ)って、常に須らく仏に近づき、無生忍を得已って、方に能く衆生を救うべし。船を得たる者は、又た『論』に云く「譬えば嬰児釈名に曰く、人始めて生るを嬰児と曰う。胸の前を嬰と曰う。之れを嬰の前に抱きて、之れを乳養するを名づけて嬰児と為す。の母を離るることを得ず、若し母を離るれば、或いは沈井に堕し、乳に渇して死するが如く、又た、鳥子の羽翅未だ成らざれば、只だ樹に依りて枝を伝うことを得て遠く去ること能わず。羽翮成就しぬれば 翮は下革の反り。謂く鳥の翅なり。長き羽を翮と云う、

方に能く空を飛ぶこと自在無礙なるが如し。凡夫、力無きは、唯だ専ら阿弥陀仏を念じたてまつることを得れば、便ち三昧を成ず。業成を以ての故に臨終に念を斂むれば生を得ること決定して疑わず。阿弥陀仏を見たてまつりて、無生法忍を証し已りて、還りて三界に来たりて、無生忍の船に乗じ、苦の衆生を救い、広く仏事を施すに、意に任せて自在なり。故に『論』に云く「地獄に遊戯すとは 獄に入りて苦を救うに、意に随いて自在なるが故に遊戯門と曰う、行者、彼の国に生じ、無生忍を得已りて、還りて生死の国に入りて地獄を教化し、苦の衆生を救う。是の因縁を以て浄土に生きんと求むる者は、願わくは、其の教えを識るべし。故に『十往毘婆沙論』には、易行道と名づく」上已と。

又た云く、(79)

問う。設令い、具縛の凡夫、彼の国に生ずることを得れども、邪見・三毒等常に起らん。邪見に五利使を摂す。三毒には五鈍使を摂す。云何ぞ彼の国に生じて即ち不退を得て三界を超過するこ

(79) 智顗『十疑論』（正蔵四七・七九中）。

とを得んや。答えて曰く、彼の国に生ずることを得るに、五種の因縁あり。故に不退を得。云何なるをか五と為る。一には、阿弥陀仏の大悲願力の摂持するが故に不退を得。二には、仏光常に照して、菩提心常に増長するが故に不退を得。三には、水鳥・樹林・風声・楽音皆な苦空を説く。苦集滅道に各々四行あり。苦空は但だ空なり。是れ苦諦の下の二行なり。小乗は爾るべし。今此には爾らず。豈に弥陀唯だ小行を談ずべけんや。応に、苦にして苦ならず、亦た、苦にして亦た苦ならず、苦に非ずして不苦にあらず。空にして空ならず、亦た空にして亦た空ならず、空に非ず不空に非ずと明かすべし。　円音普く応ず。仏意甚深なり。義に依りて文に依らざるは、方に教旨に契えり。故に『涅槃』に云く、凡夫は苦有りて苦諦無し、二乗は苦有り、苦諦有り、菩薩は苦は苦無くして真諦ありと。又た有漏の凡夫、彼に生じて初めて弥陀の麁相を見、有作生滅の四諦苦空の法を聞きて、後に阿鞞跋致を得。弥陀の細相を見奉りて、方に無作の四諦円妙の理を開くなり。経の中には、且く凡夫の初生に約す。故に苦空と云うなり。　聞く

者常に念仏・念法・念僧の心を起こすが故に不退なり。四には、彼の国には純諸菩薩を以て良友と為れば 小阿弥陀経』を案ずるに、云く「彼の仏に無量無辺の声聞の弟子有り。」又た云く「衆生、生ずる者は皆な是れ阿鞞跋致なりと。」今、純諸菩薩とは、彼此二土の声聞不同なり。此れは則ち穢にして苦多し。故に羅漢、苦を厭いて、灰断を欣うに依る。彼は則ち、浄にして唯だ楽のみなり。当に身便ち菩薩為るべし。釈迦在世の鹿苑の羅漢のごとく、豈に法華会上の仏道の声聞に同じからんや。此の中には後に約するが故に純諸菩薩云う。 悪縁の境無く、外か、外道・神鬼・魔なく、内ち、邪の三毒等の煩悩無し。畢竟して起らざるが故に不退なり。五には、彼の国に生ずれば即ち寿命永劫にして、仏共に斉等なり。故に不退なり。此の悪世に在りては、日月短促にして、阿僧祇劫を経て、復た煩悩を起さずして、長時に道を修すとも云何んが無生忍を得べけんや。智度論の第五十に云く、無生滅の諸法実相の中に於て、信受し通達し無礙不退なる、是れを無生法忍と曰うと。別円地住の菩薩、方に此の忍を得るなり。又た一師の

云く、無生とは、是れ境、所執の生無きなり。法とは是れ教、無生を詮する教なり。忍とは、印証の義なり。地前の昔は聞きて未だ智をもて証すること能わず。登地已上の智、能く印証するを無生忍と名づくるなり。　此の理、顕然なり。疑うべからず已上。

又た神鸞大士の『論註』に云く、(80)

住とは不異不滅に名づけ、持とは不散不失に名づく。不朽薬を以て、種子に塗りて水に在くに瀾ぬれず、火に在くに燋がれず。因縁を得て、則ち生ずるが如し。何を以ての故に。不朽薬の力の故に。若し人、一たび安楽浄土に生じて後時に、意、三界に生じて衆生を教化せんと願わば、浄土の命を捨つれば願に随いて生ずることを得。三界の雑生の水火の中に生ずと雖も、無上菩提の種子畢竟して朽ちず。何を以ての故に。正覚阿弥陀の善住持を径るを以ての故なりと已上。

又た、慈恩大師の『西方要決』、迦才法師の『浄土論』等の中に、委しく四不退の相を明かして、以て浄土処処不退の義を判ぜり。知らんと欲せば、之いて看よ。原ねみれば、夫れ啻「一到安養永

(80) 曇鸞『往生論注』（浄全一・二四三下）。

無退失」の巨益にあずかり、「不断煩悩得涅槃分」の勝利を蒙るのみに匪ず。又た、還来済度の時、設い輪廻の苦海に入るとも猶お没人の如くにして全く愛波に溺れず、設い羑里の罪人を導くとも、宛も火鼠の如くにして更に熾焔に燋かれず。以意れば、一切衆生等、六字尊号の功力に依りて、九品清浄の金台に詣でるとも、唯だ独り心を甘露の水に洗い、眼を妙華の色に怡ばしめて、永く穢国に還来して人天を度せずんば、譬えば富貴にして故郷に帰らざるが如けん。亦た、錦を衣て暗夜に遊行するに似たらん者か。若し爾らば、胡れの眉目か有らんや。然るに我等、「歴劫以来未聞見」の西方浄土に往生して、「阿弥陀仙両足尊」の叮嚀の授記を蒙り已りて、忽ち桑梓の忍界に還りて、早く芝蘭の旧親を救わんこと、豈に曠劫の大慶に非ずや。是の如きの最勝上上の二利を得ることは是れ偏えに吾が弥陀牟尼の大願業力に持せられて然り。其の大願業力と言うは、或いは是れ住正定聚の大願、或いは亦た、不更悪趣の別誓のみ。請い問う。曰く、夫れ『洪経』『大論』等、創稟行者の住不退転の相を語るに、多くは先ず、位不退に約して、

以て之れを言う。其の位不退と言うは、是れ不堕悪趣の巨益なり。夫れ以んみれば、見惑を断ぜずして、位不退の勝用を備え、邪念を具し乍ら、四悪趣の門戸を閉ず。此れは是れ、全く不更悪趣の本誓、悲願の加持する所なり。誰れの軽毛の行人か之れを聞きて、信行せざらんや。孰れの信前の凡夫か、之れを得て尊崇せざらんや。智者省察せよ。智者省察せよ。

抑(そもそも)、諸仏設教の義相を案ずるに、随宜利物の方便には、四意不了の権巧を設くと雖も、別願済生の誓約には唯(ただただ)了義随自の真言のみを演ぶ。夫の一乗法華の如きは、是れ三世如来の出世の本懐なりと雖も、若し所被の根機無きときは、則ち一乗の開演を欠す。所謂彼の旃陀多宝の二仏、只だ三を開きて一を顕さざる等、是れなり。是れ併ら一機の純熟せざるに由るのみ。若し、機縁の有無に由りて説教も亦た存没有るの義を以て之れを推さば、諸仏浄土の中には権機無きが故に全く三乗の権法を説くこと有るべからず。然る所以は、『法華』の妙文に、「説教の一三は国土浄穢に因る」[81]と云うが故なり。若し爾らば、華光如来の浄土に於ては、三

(81) 出典未詳。

乗随他の漸教を説くべからざるの道理、居然なり。然りと雖も、身子尊者、婆羅門の乞眼に因りて退せし時、願じて、成仏の日、必ず三乗の法を開かんと云えるが故に、離垢世界に権機無しと雖も、本願を果遂せんが為に、且らく随他の権法を敷演するなり。『法華』に云く「彼の仏の出でたまえる時は、悪世に非ずと雖も、本願を以ての故に、三乗の法を説く」[82]と上已。妙楽大師、之れを受けて云く、「土、浄にして、唯一なれども、願に酬いて三を説く」[83]と上已。又た云く「上品の浄土には須らく開漸すべからず。故に願に因りて乃ち説有るべしと云う。香積には、願無きが故に、説くことを得ず」[84]と上已。又た道暹師は、「但し本願を遂げて権機に被るには非ず」[85]上已と判ぜり。

彼の鷲子尊者、乞眼の悪縁に値いて、暫時、開三の権願を発して、「不説三乗不取正覚」と云わざるすら、猶お非被権機の開演を設く。今、法念索多の二転の大果に代えて、慇懃に超世の本願を立てて、「若不爾者不取正覚」と云えば、豈に行者をして菩提の行願を退失せしむべけんや。学者商量せよ上已。他力不退の相を

(82)『法華経』(正蔵九・一一中)。
(83) 湛然『法華文句記』(正蔵三四・二五七上)。
(84) 湛然『維摩経疏記』(卍続蔵一八・八七〇中)。
(85) 道暹『法華経文句輔正記』(卍続蔵二八・七一五中)。

明かし竟んぬ。

問うて曰く、浄土修行の不退の相は、経文明鑑なれば、仰ぎて之れを信楽す。穢土修行の退大の義、其の説、出でて何れの文に在りや。

答えて曰く、『瓔珞経』に云く、[86]

諸の善男子、若し一劫二劫乃至十劫、十信を修行して、十住に入ることを得。是の人、爾の時、初めの一住従り第六住の中に至る。若し、第六の般若波羅蜜を修すれば、正観現前して復た諸仏菩薩善知識の所護に値う。故に、第七住に出到して常に不退に住す。此の七住自り以前をば、名づけて退分と為す。仏子、若し退せざる者は、第六の般若に入りて空を修行す。我れと人と主者と無く、畢竟して無生なり。必ず定位に入る。仏子、若し、善知識に値わざれば、若しくは一劫二劫乃至十劫に菩提心を退すること、我が初会の衆の中の八万人の退くこと有るが如し。浄目天子、法才王、舎利弗等の如き、第七住に入らんと欲するに、其の中に悪の因縁に値うが

(86)『菩薩瓔珞本業経』（正蔵二四・一〇一四下）。

故に、退して凡夫不善の悪中に入る。習種姓の人、退して外道に入ると名づけず。若しは一劫、若しは十劫、乃至千劫、大邪見及び五逆を作り、悪として造らざること無きを、名づけて退相と為すと已上。

妙楽の第六に云く、(87)

土浄にして唯だ一なれども願に酬いて三を説く。即施即廃す。問う、何の処にか願を説くや。答う、『大悲空蔵経』に準ずるに、六十劫に於て、菩薩の道を行ず。波羅門の乞眼に因りて退せし時、成仏の日、三乗の法を開せんと願ずといえりと已上。

問うて曰く、六住退大の説は、是れ権説とや為ん、将た実説とや為ん。

答えて曰く、諸宗の所談、各別にして、権実の二途、定め難き者なり。若し法相宗の意に依りて之れを言わば、彼の宗の意は、地前断惑の義を許さず。故に伏惑現起して退大流転すと云えり。若し此の旨を存ぜば、是れ実説なるべし。

(87) 湛然『法華文句記』（正蔵三四・二五七上）。

曰く、敢えて問う。曰く、慈恩大師の『唯識述記』に云く、[88]

瑜伽に説かく、勝解行の菩薩は、三処に於て妄失して猶お煩悩を起こすがごとし。或る時は、戒を捨つ。所説の諸法は、闇中に射るときに或いは中り、中らざるが如し。故に此の位の中に自ら分別して煩悩未だ尽さずと上已。

又た『地持論』第八に云く、[89]

解行住の菩薩、或る時は邪の身口意業を起こし、有る時は五欲の境界に貪着す。或る時は顛倒して受生す。或いは正念を忘失す。或る時は退して大菩提心を捨つ。或いは菩薩戒を犯す。解行、下忍に住する時、上の説の如し。中上忍は、是の如くならずと上已。

設い伏惑退大の義を存すと雖も、已入僧祇の六住を退して、謗法断善の邪人と作らんこと、学仏の大士、豈に傷嗟せざらんや。

又た、『五教章』に云く、[90]

『本業経』に、十住の第六心に退有りと説くことは、『起信論』の中に彼の経文を釈して示現退と為す。慢緩の者をして其の

(88) 基『成唯識論述記』（正蔵四三・五六〇上）。
(89) 『摂大乗論章』（正蔵八五・一〇一四下）に引用あり。
(90) 法蔵『華厳五教章』（正蔵四五・四八九中）。

心を策励せんが為の故に。実には、菩薩、発心住に入れば、即ち不退を得」上已と。

若し、天台宗の意に依りて之れを言わば、別教の十住は、是れ断見除思の位なるが故に、全く実退の人有るべからず。所以に『瓔珞』の説を以て、以て権説に属す云云。

問て曰く、天台宗の意、六住退大の文を以て権門の義に属して、之れを勘判すること出でて何れの文に在りや。

答えて曰く、『菩薩戒疏』に曰く、(91)

止観師の説かく、是れ十信の中の六心退のみ。比釈(92)論師及び金剛般若論師、皆な此の解を作す。是れ信習十心の中の六心のみ。七心上已は、永く二乗を離る。爾の時設い利の為に経を弘むるとも、軽漏無きにあらず。而れども度物の心、失せざれば、恒に菩薩の名有り上已と。

頂山師、之れを受けて 薀斎記 云く、(93)

此れ乃ち疑うべきの義なり。熙鈔に、『起信』を引きて、権退に大小の二義有り。四明克く克く円人の示跡に就いて之れ

(91) 智顗『菩薩戒義疏』(正蔵四〇・五六五上)。
(92) 底本には「北」とあるが、頭注及び引用原典には「比」とあるため訂正した。
(93) 薀斎『頂山記』を指すか。佚書のため出典未詳。

を言う。若し権説を作さば、何ぞ難を釈すべき。又た、全く妙楽の記に背く。

又た、四明、日本に答えて云く、(94)

遂に義を以て求めて斟酌して之れを言う。甚だ疎脱なり。今謂く、疏に旧に十住第六心退并に問答等を引くと雖も、但だ「終是難通」と云えり。止観師、北釈論師、般若論師、十信心中の第六心等を作て後進をして持せしむ。之れを択べ、起主の意を観るに、若し疏の文に依らば、二説を存す。亦た之れを用ゆべし。但し旧に六住と云うは、一往竪に説くは、則ち難通と為す。乃ち婆沙横断の義に依れば則ち旧説通しつべし。此れ乃ち記主の足して祖意を成ずるなり。妙楽、恐と云うは、一には古師の竪断に対し、二には吾が祖の信住に対す。皆な用うべきなり。請う、眼有らん者は之れを観よ上已と。

又た、宋朝の知礼法師、本朝の恵心の問を決して云く、(95)

若し、常程の別教皆な初住に見を断じて、更に諸の重過を起こさずと云えり。況んや見惑は一位に頓断し、思惑は乃ち諸

(94) 出典未詳

(95) 宗暁『四明尊者教行録』（正蔵四六・八八五下～八八六上）。

位を歴て方に尽す。蓋し常に談ずる所の別教の分斉なり。今、記主釈して云く「身子六住に尚お退して、復た重罪を起こす」と。遂に義を以て求むるに、恐れらくは教門に見思倶に断じて六心に至る時、思、猶お未だ尽さず、見、亦た余残有らん。所以に能く悪道に牽く。此れは是れ、記主、義に約して斟酌するの詞なり。現行の別教を将て難ずべからず上已と。

又た、安海供奉の云く、[96]

別教は、初住より不退なるべし。但し、身子が難に至りては、別教の教門一途の意なり。所以に記の五に云く[97]「見思倶に断じて六心時に至る。見、猶お未だ尽さず、六心、尚お退す」上已と。

又た、五大院の云く[98]「故に六心に至りて退して生死に入るとは、或いは別教教門の異説なり」上已と。又た、慈覚大師の『止観記』に云く、[99]

第六住退とは通教内凡の性地なり。別名を以て通次に名づけて通位を明かす。故に第六巻の本文に云く「若し、別妙を借

(96) 出典未詳。
(97) 湛然『法華文句記』（正蔵三四・二六四上）。
(98) 出典未詳。
(99) 円仁『止観私記』（出典未詳）。

りて通に名づけば、外凡三賢は是れ乾慧地なり。十信と名づく。四善根内凡は是れ性地なり。十住十行十廻向と為す云云。舎利弗、昔、十六王子に従いて『法華経』を聞くことは円教の観行に在り。円教を退するに依りて、小を取るなり。而るに、第六住退と云うは、通教の位を借りて円の観行に名づく。若し爾らば、性地退と云うべし。但し、是れ第六住退とは、只だ、別名を借りて通に名づけて以て通位を釈す。故に住と云う。問う、通の性地は是れ内凡なり。円の観行は是れ外凡なり。何ぞ通の性地を以て円の観行の位に名づくるや。答う、今、退有るの位に約して内外凡を論ぜず」上已と。

此の所判の意、『瓔珞経』の説文は、是れ則ち、円教の観行即の人の退相を云う。而も、名別義通の義門に約して、以て第六住退の相を説く。黒谷先徳の一義も、亦た、名別義通の意と云えり。又た、智証大師の『法華論記』に云く、(100)「別位を借りて通教に名づく」上已と。又た、伝教大師の『愍喩弁惑章』に云く、(101)

此れを通ずるに二説有り。一には云く、第六住より退すとは、

(100) 円珍『法華論記』（『日仏全』二五・智証大師全集一、二八下）。

(101) 最澄『愍喩弁惑章』（出典未詳）。

是れ仏の権説なり。其の実は不退なり。是の故に竜樹の『十住婆沙論』に云く、「十住退とは、地前の菩薩を怖して速かに初地に入らしめんが為の故に退と云う。其の実は不退なるべし。二には、第六住退とは十信の第六信退と云うべし乃至。故に只だただ信を呼びて住と為すべし」已上と。

又た、智証大師の『論記』に云く、[102]「六住とは、此の義、只だ信を呼びて住と為すべし」已上と。黒谷先徳の云く[103]「或が伝く、十住とは、是れ十信の名なり」已上と。夫れ設い、呼信為住の義を存すと雖も、一万劫の十度を退出して、三悪趣の楚毒を呑まんこと、豈に道人の愁吟に非ざるべけんや。又た、馬鳴の『起信論』、竜樹の『釈論』、権退の義を明かす。故に、慈川の道熙師、『起信論』を引きて、権退の旨を判ぜり。又た、黒谷先徳の云く[104]「或が云く権退」云云と。又た、智証大師の『論記』に云く、[105]

『智論』の地前を怖れしむるとは、身子の位に依り。迹事を以て示現を為すとは、義意通ずることを得たり已上と。

又た、嘉祥の『法華義疏』第二に云く、[106]

(102) 円珍『法華論記』(『日仏全』二五・智証大師全集一、二八下)。
(103) 出典未詳。
(104) 良忠『往生要集義記』(浄全一五・二三四上)に同文あり。
(105) 円珍『法華論記』(『日仏全』二五・智証大師全集一、二八下)。
(106) 吉蔵『法華義疏』(正蔵三四・四六一下)。

舎利弗、六十劫に道を行じて六心中にして退せりと。中とは、此れ則ち是れ、六信を仰学して猶お未だ六信に登らず。而るに『瓔珞経』に云く、六住に退すとは、竜樹、此の語を釈して云く、地前の菩薩を怖れしめて、速かに初地に入らせしめんと欲するが故に、退と云うのみ。其の実は不退なり已上と。又た、『大論』十二の僧侃(かん)の疏に云く(107)「此れ蓋し、仰学の十信の中の第六心なり。正しく十住の心に入ると謂うには非ず」已上と。

問て曰く、天台宗の意として、十住は断見思の位なるが故に、実退の人あるべからず。但し、『瓔珞経』の説に至りては、是れ教門一途の仮説なりと談ずることは、是れ一往の廃立か。将(は)た又た、再往の施設なるか。

答えて曰く、多分は教門の権説と云えり。今謂く、別教十住の菩薩は、是れ惑を断ずと雖も猶お是れ実に退大流転すべし。

請い問う、曰く、此に二義有り、一には曰く五部合断の義、二には曰く次第断惑の義なり。初めに、五部合断の義と言うは、妙楽の第五に云く、(108)

(107) 出典未詳。
(108) 湛然『法華文句記』(正蔵三四・二六四上)。

六心中退とは、瓔珞経の意に準ぜば、身子、十住の中の第六心に於て退すといえり。恐らくは是れ爾(そ)の前(さ)きの見思、倶に断ずれども、六心の時に至るまで、見、猶お未だ尽きずして、六心猶お退す已上と。

夫れ妙楽の中に、初めに見思倶断と言うは、正しく五部合断の義を顕す。次に、見猶未尽と言うは、五部合断するが故に見惑猶お未だ尽きずして六住にいたる。故に六住猶退大と判ずるなり。此の解釈は、正しく実義に約して退義を判ずるのみ。

問て曰く、別教の菩薩、五部合断とは何らの援拠有りや。

答えて曰く、恐是爾前、見思倶断、至六心時、見猶未尽、六心尚退の詳判、其れ誠証なり。茲に因りて、御廟大師も五部合断の義を存せり。又た、五大院の云く、(109)

若し、此の経に準ぜば、恐れらくは、六住已前に見思を断ずと雖も、六住に至りて、見、未だ断尽せざるが故に、常途におなじからず。一聚頓教は、聖説端(きざ)し多し。一機を誘うが為に此の断位を説く。一類超断有りとは、凡地に在る時、有漏

(109) 出典未詳。

智をもて下八地の見思の二惑を断ずるに、第六住に斉し。此の人、別教に入りては七住に到るべし。若し、諸仏菩薩の善知識に遇いて、能く空恵を修せば、即ち七位に入るべし。若し、悪縁に遇わば、還りて生死に入るべし。経には此の意を帯びて、六住退と説けり。故に、恐是爾前、見思俱断、至六心時、見猶未尽と云うなり上已と。

又た、黒谷先徳の云く、(110)

見思俱断とは、此れは、有漏智を以て下八地の見思の惑を断ずれども、有頂地の見、猶お未だ尽さず。故に、六心に至る時、退す上已と。

但し、此等の諸義の意は、本、凡地に在るの時、下八地の煩惑を断じての後に、別教の十住に入れるの人に約して、以て言うことを為す。今一流相承の趣は、未だ必ずしも然らず。別教十住の菩薩の中に、一類別姓の人有りて、始めより有漏智を修して、五部合断すとなり。敢て問う。答う、例せば、二乗の断証に、類聚断有り、次第断有るが如し。唯識の第十に云く。一類の二乗は三界

(110) 出典未詳。

九地を一二漸次に九品にして、別に断ず。一類の二乗は、三界九地を合して、一聚の九品と為して、別断すといえり。又た、一類別教の十住菩薩有りて、始め初住の位より、終り第六住に至るまで五部合断せんに、何の相違か有らんや。但し、『唯識論』は、初果に約して言うことを為す。敢て問う。曰く、未入仏法の人に就いて、五部合断するに、二類の不同有るべし。一には曰く外道異生、二には曰く凡夫異生なり古徳の意。又た、已入別教の人の中に、五部合断する有り。いわゆる、初住自り六住に至るまで、有漏智断を用いる、一類別教の行者、是れなり一流相伝。上已五部合断の義、畢んぬ。二に、次第漸断の義と言うは、設い、別教十住の菩薩、真空無漏の智を以て、実に見思を断ずと雖も、何ぞ退大流転の義無からん。且く数家の所談に依るに、五種の退縁に値いて、四果の高位を失すと云えり。若し爾らば、設い、六住断見思の人と雖も、実に退大取小すべきなり。

問て曰く、毘曇有門の意は、事相浮偽の迷いに於て、已前に断尽すれども、尚お重ねて起こり易きが故に、思惑退起の義をあか

す。五見迷理の惑に於ては、破石頓断の後、永く起らざるが故に、初果退失の義をゆるさず。彼に準じ之れを思うに、別教六住の菩薩、設い思惑を退起して二住に至ること有りと雖も、全く見惑を退起すること有るべからざるが故に、初住の位を退すべからず。如何。

答えて曰く、『瓔珞経』の炳文を見るに、六住退の義相を説くとして、作大邪見、及五逆罪、無悪不造、是為退相と云えり。是の説の如くんば、猶お初住に退して逆謗の輩と作るべしとみたり。

難じて曰く、見惑を断ずるの人は、藤起虵覚の妄情を翻じて、四真諦不生の極理を見るなり。若し爾らば、何ぞ反りて縄起虵覚親迷理の惑を起こすべきや。

答えて云く、見惑を退起せずというは、自ら是れ数家一途の論説のみ。『頌疏』の第十二に云く、(111)

薩婆多宗に依れば唯だ預流果、必定して退無し。迷理の見道お惑を断ずるを以ての故に、諦理真実、楷定して依るべし。

(111) 円暉『倶舎論頌疏』（正蔵四一・九五四中～下）。

聖慧已に証す。必ず退する理無し。後の三果は、退果有りと許す。修道の惑は、是れ迷事なるを以ての故に。事相浮偽にして定んで依るべき無し。彼に迷い惑を断ずる失念退あり。若し、大衆部は預流果に退有り、阿羅漢は退無しといえり。経部宗に依れば、預流、羅漢、必ず退果無しといえり上已。

又た、『宗輪論』の中に、盛んに前三果退失の義相を明かせり。若し彼に準じ之れを言わば、初住を退して闡提と作らんに、義に於て違うこと無し二義倶に是れ実義にして教門にあらず。智証大師の『論記』の一義に云く(112)「或いは六心とは、是れ根不同に依る」上已と。今、所判の意を案ずるに、上に「呼信為住、名別義通、欲怖地前」等の種種の義を挙げ畢りて、下に「或六心是依根不同」と云いて、更に又た一義を成したまえるは、恐らくは是れ五部合断の人と、漸次断惑の類とに実退有ることを示さんか。智者、心を留めて指を染めよ。心を留めて指を染めよ。

問て曰く、数家の意は五縁五証の文理を出だして羅漢退落の義を立すと雖も、論家の所談は二十余条の援据を挙げて固く応果不

(112) 円珍『法華論記』(『日仏全』二五・智証大師全集一、二八下)。

退の旨を成ぜり。若し爾らば、何ぞ強いて薩婆多大衆部等に依りて、以て例証と為して、別教の六住退の義相を詳勘するや。何如。

答えて曰く、仁者、天の清めるを以て地の濁れるを難ずること莫れ、火の熱を以て水の冷やかなるを沮(はば)むこと勿れ。仁者、『成論』の説を以て我を詰せば、我れは亦た、毘曇の文を以て反りて仁者を責めん。若し夫れ、此の如くならば、所立、乖違無きものをや。

因論生論す。

問て云く、数家論家の退不退の二義、終使(つい)に融会すべきや。

答えて曰く、論師の異論、須く和会すべからず。

問て曰く、若し、通惑断尽の人尚お退して邪見闡提の輩と作ると言わば、円教相似即の行者も亦た起惑退して流転の邪人と作るべきか。如何。

答えて云く、前の二の行人は、観恵偏真なるが故に断惑の位に於て猶お起惑退す。円教の修行は三観巧妙なるが故に十信の位に登りなば、全く退すべからず。

『法華文句』第九に云く、[113]

(113) 智顗『法華文句』(正蔵三四・一三七下)。

円の初心は即ち不退なり。寿量を聞く功徳、外自り資け、円順の信解、内自り薫ず。所以に不退なり上已と。

妙楽の第九に云く、[114]「初信より七信に至るまでを、位不退と為し、八信を行不退と為す」上已と。

又『玄義』第六に云く、[115]「若し、相似の益は生を隔つれども忘れず」上已と。

問て曰く、円教の名字観行の人退大流転すということ、出でて何れの文にか在りや。

答う、『仁王般若』に云く、[116]

十信の菩薩は、退有り進有り。譬えば、軽毛の風に随いて東西するが如し。是の諸菩薩も亦復た是の如し上已と。

『玄義』第六に云く、[117]

名字観行の益、生を隔つれば則ち忘る。或いは、忘れざる有り。忘るる者も、若し知識に値えば、宿善還りて生ず。若し悪友に値えば、則ち本心を失す上已と。

別教の十信と円教五品と、同じく是れ未断にして、其の位斉等な

(114) 湛然『法華文句記』（正蔵三四・三四二下）。
(115) 智顗『法華玄義』（正蔵三四・七六一中）。
(116) 鳩摩羅什訳『仁王般若経』（正蔵八・八三一中）。ただし多少の異同があり、円測『仁王経疏』に一致する箇所がある。
(117) 智顗『法華玄義』（正蔵三三・七六一中）。

り。故に倶に退失するのみ。又た、『文句』第七に云く、[118]

「醉酒而臥」とは、干爾の時に当たりて、大機暫く発し無明暫く伏して経を聞くことを得て、内心微し解しぬ。無明重きを以ての故に還りて復た迷失す已上。

妙楽の第七に、之れを受けて云く、[119]「或いは五品の初、未だ相似に入らず」已上。同第六に云く、[120]「理に準ずれば、退者は多くは五品位の前に在り、不退の位に対せんが為に、且く五品を以て退位と為るのみ」已上。『釈籤』の第一に云く、[121]

退大流転するを以ての故に、寂理に惑いて無明の酒に耽る、大悲の心を失するを以ての故に。妙因に迷いて生死曠遠なりと謂う。

又た云く、[122]

中道を障る微細の無明に耽る、故に大志を失す。復た現行の麁欲の無明に耽りて、本所受を忘る已上と。

妙楽の第六に云く、[123]

本、大縁を結び、寂光を土と為す。期心の契うところは、法

(118) 智顗『法華文句』(正蔵三四・一〇六下)。
(119) 湛然『法華文句記』(正蔵三四・三〇三中)。
(120) 湛然『法華文句記』(正蔵三四・二七八中)。
(121) 湛然『法華玄義釈懺』(正蔵三三・八一八上)。
(122) 湛然『法華玄義釈懺』(正蔵三三・八一八上)。
(123) 湛然『法華文句記』(正蔵三四・二七六上)。

界を機と為す。退大より已来(このかた)穢土と全く失して、今、五道に流す。本に望みて他と為す。方便有余も尚お已界にあらず。況んや復た、五道流転の者をや。今、窮子の所居、現に五濁に処す。且く所住を以て本に望みて他と為す。爾れ自り以来(このかた)常に三界に在り。故に久住と云う已上と。

凡そ譬喩、信解、化城、寿量等の諸品の中に、盛んに退大流転の相を明かせり。繁を恐れて之れを挙げず。知らんと欲せば、之いて看よ。又た、小乗数家の意は、五種の退縁を恐れて六欲の天上に住すといえり、云云。此の例、一にあらざれば、縷説するに遑あらず。曰く、敢て問う。曰く、『釈籤』に云く、[124]「法譬二周の得益の徒は往日結縁の輩にあらずと言うこと莫し」已上と。

問て曰く、『梵網の義記』に云く、[125]

旧に云く、法才王子、六心の中にして退す。即ち、「十住の第六心」と云う。難じて云く、十住をば性地という。性は不改を以て義と為す。云何んが退して二乗と作さん。其れ猶お、一答すらく、性は是れ一闡提と作らず。大を退して小に向う

(124) 湛然『法華玄義釈懺』（正蔵三三・八一八上）。

(125) 智顗『菩薩戒儀疏』（正蔵四〇・五六四下）。

ことを妨げず已上と。

若し、此の説に依らば、退大の人、謗法闡提の彙（たぐい）と作らずして只だ二乗の聖人と作るといえり。然るに、『玄文』に云く、[126]

諸師云く、中上は是れ三果の者（ひと）なり。然るに此等の人は三塗永く絶ちて、四趣に生ぜず。現在に罪業を造ると雖も、必定して来報を招かず。仏の説に言いたまうが如きは、此の四果の人は、我れと同じく解脱の床に坐す已上と。

夫れ、二乗孤調の小行も三途解脱の捷径なり。若し爾らば、何ぞ強いて退大取小を愁うるや。

答えて曰く、此の言、聞くに忍びず。夫れ、孤調の小心は、菩薩大行の為には、是れ、鴆羽（ちんう）毒か。灰断の執情は解衆生縛の為には、迺（すなわ）ち、生金銀ならん。所以に『荘厳論』の偈に云く、[127]

恒に地獄に処すと雖も、大菩提を障えず。若し、自利の心を起こすは是れ大菩提の障なり已上と。

『大般若』に云く、[128]

若し、菩薩、設い殑伽沙劫に、妙五欲を受くとも、菩薩戒に

(126) 善導『観経疏』（浄全二・六上、正蔵三七・二四八上）。
(127) 智顗『菩薩戒儀疏』（正蔵四〇・五六四下）。
(128) 玄奘訳『大般若波羅密多経』（正蔵七・一〇二二中）。

於て猶お犯と名づけず。若し、一念二乗の心を起こさば、即ち名づけて犯を為す已上と。

『摩訶止観』の第二に云く、[129]「大論に云く、寧ろ、悪癩野干の心を起こすとも、声聞辟支仏の意を生ぜざれ」已上と。又た、『三論玄』に云く、[130]「大品には二乗を呵して痴狗と為す。浄名には、声聞を貶して敗根と為す」已上と。又た、『梵網』の頓制に云く、[131]

若し、仏子、禁戒を護持して乃至常に大乗の善信を生じて、自ら、我れは是れ未成の仏、諸仏は是れ已成の仏なりと知るべし。菩提心を発して念念に心に去らざるべし。若し、一念二乗外道の心を起こさば、軽垢罪を犯す已上と。

『義記』に之れを受けて云く、[132]

暫念小乗戒は本の所習に乖くが故に制す。乃至 大に背きて小に大向わんと欲する心計、未だ成ぜざれば、前の第八の背大向小の戒を犯す。計成ずれば戒を失す。第十重戒の中に在りて説く、此の戒の所制は大を背むかんと欲せずして、正しく、小乗は行じ易し。且く結を断じて然して後に生を化せん

(129) 智顗『摩訶止観』（正蔵四六・一七中）。
(130) 吉蔵『三論玄義』（正蔵四五・六上）。
(131) 鳩摩羅什『梵網経』（正蔵二四・一〇〇七中）。
(132) 智顗『菩薩戒儀疏』（正蔵四〇・五七八中）。

と欲すと。乃至 一念も自度の想を起こすべからず。外道とは、二乗を指して外道と為す已上と。

夫れ暫念小乗戒を犯するの人は、是れ鶩子の類のみ。又た、同『義記』に云く、(133)

第八に背大向小戒乃至若し決して、大は劣なり小は勝なりと謂いて、計成ずれば戒を失す。若し心の邪画未だ成ぜざれば、軽垢を犯す。同じく此の戒の制なり。今、背大向小を挙げて語ることを為す。凡夫の菩薩は多く此の事を行ずるを以ての故なり已上と。

又た謗三宝戒に云く、(134)

暫信小乗とは、大乗は高勝なりと知りて、且だ煩悩を断じて小果を取りて、後更に、大を修せんと欲す。此れを念退と名づく。若し、計成ずれば軽垢を犯す已上と。

此れ等の諸文、皆な退大取小の人を以て毀犯他勝処の悪人と名づけたり。若し夫れ、大乗の尸羅を毀破せば、豈に生死の海底に沈溺せざるべけんや。大を退けて小を取らんと欲する疲夫の大過失

(133) 智顗『菩薩戒儀疏』(正蔵四〇・五七五下)。
(134) 智顗『梵網菩薩戒経義疏』(卍続蔵三八・一五中)。

の相貌斯くの如し。但し、『増一阿含』中に、世尊、富楼那を歎じて「我れと同じく解脱の床に坐す」と言いたまうに至りては、[135]是れは、四住を断除して分段を解脱するの義篇に約して言うことを為す。若し、法身と度生との二途に約して之れを言わば、二乗は是れ痴狗か、是れ野干か。法身は諸仏の内証、済度は如来の素懐なり。二乗、已に之れを捨つ。豈に大聖と等同なるべけんや。『唯識述記』に云く「仏は二名を得たまえり。煩悩を離れたるが故に、解脱身と名づく。所知障を離れて無辺の徳を具すを以て名づけて法身と為す」と。又た云く、[136][137]

二乗の所得の此の二、転依の果をば但だ解脱身と名づく。生死と及び縛法とを解脱するが故に。彼の転依は、十力等の殊勝の法に荘厳されたること無きを以ての故に、法身と名づけず。殊勝法とは、所知障を断じて無量功徳の依を得るが故に。『解深蜜経』と七十八等に、真如を説きて解脱身と為す。世尊、二乗の所得の転依をば法身となづくと言わんや不や。善男子、法身となづけず。当に何なる身とや名づくべし。解脱身

(135) 出典未詳。
(136) 基『成唯識論集記』（正蔵四三・六〇三中）。
(137) 基『成唯識論集記』（正蔵四三・六〇三上）。

と名づくべし。解脱身に由るが故に。二乗と仏と平等平等なりと説く。法身に由るが故に。差別有りと説きたまえり已上と。有智の人、知んぬべし。抑彼の安養浄土には、設い小聖有りと雖も、転向大乗の後、曽て、捨大入小の人無し。婆薮波豆論主の、所謂る「大乗善根界、等無譏嫌名、女人及根欠、二乗種不生」(138)といえる者なり。浄土の修行の廻小向大と、穢国の勤行の退大取小とを相比して、之れを判ずるに、実に比類と為ることを得ず。智者商量せよ。智者商量せよ。

敢て問う。答う、若し、此の方の修治断除に依れば、五品六往の高位を退して、三悪四趣の楚毒を呑み、四果殺賊の威力を失して流転生死の卑位に下れることは、是れ即ち、偏に穢土修行の大過失なり。抑又た、道人現に見ざるや。戒公哲老が先蹤、行者親り聞かざるや。慧師草堂が旧跡、智者等、当に虎の尾を履み、竜の髭を摩ずべし。応に深淵に臨み、薄氷を践むべし。於戯宜べなるかな、実なるかな。一たび、浄刹に詣ずれば、蠱毒の女人無ければ法性の妙体を害せず、班猫の乞眼無ければ六住の高位をも

(138) 世親『往生論』(正蔵二六・二三一上)。

奪われず。竜猛大士、「彼尊仏刹無悪名、亦無女人悪道怖、彼尊無量方便境、無有諸趣悪知識」[139]と判じたまえるは、蓋し此の謂いか。凡そ沈壇を聞き、百味を嘗むる、皆な是れ、増進仏道の資糧なり。衆色を見、諸音を聴く、見仏聞法の勝縁にあらずと云うこと莫し。然るときは則ち、光明宝林の、一実相を説くの朝(あした)には速かに十往真因の高位に登り、諸上善人の同法席に会するの夕(ゆうべ)には早く二転究竟の大果を証す。此方の修行の多分は退転すると浄刹勤修の一向不退なるとは、孰(いず)与れ全く比校にあらざるをや。古に云く、[140]

夫れ、函車の獣、介して山を離るれば、則ち罔罟(もうこ)の患をまぬがれず。呑舟の魚、碭(とう)して水を失えば則ち蟻も能く之れを苦む已上と。

爰に我等異生等、金邦に適(おもむ)くと雖も、未だ断惑の高科に登らず、聖衆に列すと雖も猶お底下の凡位に在り。然るに宝刹を出でて桑梓に還り、悲心を起こして群品を化すとも、全く起惑罔罟の患え無く、便に奈梨蟻虫の怖れを離れたり。是れ則ち、住正定聚の本

(139) 闍那崛多訳『十二礼』(卍続蔵二・一五五中)。しかし、善導『往生礼讃』(浄全四・三六四上)の方が近い。

(140) 『荘子』雑篇・康桑楚。

誓の加持を被りて、還来済度を致す所以なり。夫れ意んみれば、持名の行者等、先ず安養の宝刹に生じて不退の尊位に登り竟りて後、穢国に還来して、衆生の無明を抜き、生死の淤泥を出ださしむ。厥熙怡歓悦、漢高の沛郡に帰りて舞遊するとは、孰与れ蘇武が故京にいりしの眉目とは、孰与れ聖道初心の菩薩の親友の貧里に彳(たたず)みて度脱衆生の策(はかりごと)を運(めぐ)らすは二利倶に失す。宛も項王の烏江を度せんと欲するが如けん。亦た、余子が寿陵に還りしに似たり。胡(なん)の顔(おもて)かあらんや。智人商量せよ。智人商量せよ。

曰く、敢て問う。答う、夫れ十方西方は総別の異なるが故に其の巨益同じく浄土宗に結帰す十住論の意。請い問う。曰く、本誓有無の差異のみ。二祖綽公の『安楽集』、天台国師の『十疑論』、慈恩大師の『西方要決』、智覚禅師の『万善同帰集』等の諸書の中に、馬鳴大士の『起信論』、竜猛尊者の『大智論』を引きて、委しく浄穢二土の修行の高卑を詳判して、此方の修治を捨てて彼土の断除を取らしめたり。知らんと欲せば之いて見よ。又た、法照国師の云く、[141]

(141) 法照『五会法事讃』(浄全六・六八三上)。

西方の進道は娑婆に勝れたり。五欲乃び邪魔無きに縁りてなり。成仏するに諸の善業を労くせず。華台に端坐して弥陀を念ず。五濁の修行は多く退転す。念仏して西方に往くには如かず。彼に到りぬれば自然に正覚を成ず。苦界に還来して津樑と作る已上と。

夫れ道士見ざるや。「若諸有情、生彼土者、皆不退転、阿耨菩提」(142)の金言。修者、聴かざらんや。「一到弥陀安養国、畢竟逍遥即涅槃」(143)の高判を。宜しく開眉破顔すべし。当に熙怡微笑すべし。夫れ若し、聖道諸宗の行者等、且く五濁修行多退転の難行を閣きて、専ら不如念仏往西方の易行を勤めよ。是れ則ち麗姫が悲悔か。麗姫が悲悔か。古に云く、(144)

無常の暴風は神仙をも論ぜず、奪精の猛鬼は貴賤をも嫌わず。財を以ても贖うこと能わず、勢を以ても留むることを得ず。延寿の神丹千両服すと雖も、返魂、奇香、百斛尽く燃くも、何ぞ片時を留めん。誰か三泉を脱せん上已と。

夫れ干莫の利刃、能く物を断つ。尊号の湛盧、豈に然らざらん

(142) 玄奘訳『称讃浄土経』(浄全一・一八七下)。
(143) 善導『般舟讃』(浄全四・五三三上)。
(144) 空海『三教指帰』(『弘法大師全集』第三輯、三四九。

や。南無阿弥陀仏。

浄土十勝箋節論巻上

乾下終